【美術学部】
「独立した作家、専門職業人の育成」と言う目的実現のために、①専門知識と総合的視野の獲得を可能とするバランスの取れた課程編成、②特に専門教育では基礎的知識・技能と応用力を身につけるための段階的なカリキュラムときめ細やかな指導を目標としている。
教育手法については、課題解決型の手法を用い“自ら考え、自ら動き、自ら伝える”能力の修得を目指している。
【造形表現学部】
美術学部と同じ専門領域のため、基本的に同一目標を掲げている。上記目標に加え夜間学部であることから、社会人への教育機会の提供を独自目標として掲げている。
【大学院美術研究科】
学部教育を基礎とした専門領域の深化と、理論と実技の両立を目標に掲げている。ゼミ制を導入したマンツーマン指導より、この目標を実現することを目指している。

（１）学士課程の基本的な考え方：●

適用	記述に係る主要点検・評価項目
大学・学部	Ａ群：学部・学科等の教育課程と各学部・学科等の理念・目的並びに学校教育法第 52 条、大学設置基準第 19 条との関連 Ｂ群：「専攻に係る専門の学芸」を教授するための専門教育的授業科目とその学部・学科等の理念・目的、学問の体系性並びに学校教育法第 52 条との適合性

ａ．専門教育と教養・総合教育の両輪

「高い専門性と総合性の融合」を教育目標に掲げ、①学科等が編成する専門性の高いカリキュラムと、②共通教育センターが編成する教養・総合教育のための横断的カリキュラムから成る（表Ⅱ-三-1・2 参照）。両カリキュラムを車の両輪のように編成し、「高い専門性と総合性の融合」を実現することを目標としている。

学士課程の授業科目は、学則上で「専門教育科目」と「基礎教育科目」の２つに分類している。①各学科等は、領域に対応した専門性の高い専門教育科目を開講している。②共通教育センターは、全学生を対象とする横断的な共通教育カリキュラムを編成する。

専門教育カリキュラムと共通教育カリキュラムを詳述する前に、②の共通教育カリキュラムの科目構成について注釈を次のとおり記述する。

【共通教育カリキュラムの注釈】

美術学部においては、「共通教育科目（学則上では“共通基礎教育科目”と“共通専門教育科目“に分類される)」として括られ、教養・総合教育に関する授業科目をバランスよく開講している。この他に資格関連科目として、“教職に関する専門科目”および“博物館に関する専門科目”を開講している（卒業要件単位には含まない)。

造形表現学部においては、「基礎教育科目」として括られ、“総合講座科目”、“基礎理論科目”、“外国語科目”、“体育実技科目”の４つの科目群からなる。“総合講座科目”は一般教養の科目群である。“基礎理論科目”は基礎的な専門講義科目群であり各専門領域に偏らないよう、専門以外の視野を広げるために開講されている。この他に資格関連科目として、“博物館に関する専門科目”がある（卒業要件単位には含まない)。

また美術学部では、「専門教育科目」のうち、教養的側面を持つ講義科目の一部を所属学科等以外の学生が履修可能な“オープン科目”の制度を設けている。この場合、所属学科等以外の学生は、「共通教育科目」として単位が与えられる。以上のように多面的な方法で共通教育カリキュラムは構成されている。

<table>
<tr><th colspan="2">学則上の分類</th><th>カリキュラム編成上の分類</th><th>対象者</th></tr>
<tr><td>基礎教育科目</td><td>共通基礎教育科目</td><td rowspan="2">共通教育科目</td><td rowspan="3">全学生</td></tr>
<tr><td></td><td>共通専門教育科目</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="2">専門教育科目</td><td>他学科へのオープン科目</td></tr>
<tr><td></td><td rowspan="2">各学科等の学生</td></tr>
<tr><td colspan="3">教職に関する専門科目</td><td>教職課程履修者</td></tr>
<tr><td colspan="3">博物館に関する専門科目</td><td>学芸員課程履修者</td></tr>
</table>

（表Ⅱ-三-1　教育課程の枠組み・美術学部）

<table>
<tr><th colspan="2">学則上の分類</th><th>対象者</th></tr>
<tr><td rowspan="4">基礎教育科目</td><td>総合講座科目</td><td rowspan="4">全学生</td></tr>
<tr><td>基礎理論科目</td></tr>
<tr><td>外国語科目</td></tr>
<tr><td>体育実技科目</td></tr>
<tr><td colspan="2">専門教育科目</td><td>各学科等の学生</td></tr>
<tr><td colspan="2">博物館に関する専門科目</td><td>学芸員課程履修者</td></tr>
</table>

（表Ⅱ-三-2　教育課程の枠組み・造形表現学部）

ｂ．専門教育のカリキュラム

「専門教育科目」は、①専攻領域に関する基本的な知識と技能の修得、②知識と技能を応用して、主体的に創作・研究を深める能力を養うことを目標としている。

イ．カリキュラム内容

【美術学部】

・絵画学科日本画専攻
１・２年次では植物・人物・動物・風景などの課題を通じて、基礎的描写力を修得する。また材料基礎学等で素材、用具の基礎知識を身につける。３・４年次では自由制作等を通じて主体性をもって創作することにより、高い技術力、創造の精神を養う。

・絵画学科油画専攻
１・２年次では与えられたテーマと自由制作により、自分のテーマを模索する。また技法講座で様々な素材の使い方を身につける。３・４年次では各自の選択によりグループに分かれ、自主カリキュラムに基づきながら自己表現とは何かを考え、じっくりと時間をかけて方向性を探り、作家としての骨格を作って行く。

・絵画学科版画専攻
１年次では版画実技等で版画の基礎技法（木版・銅板・リトグラフ・シルクスクリーン）を体験し、２年次で木版・銅板・リトグラフから選択し基礎的技法を修得する。また版画材料学等で道具や素材の使い方を身につける。３・４年次では自主カリキュラムを通じて独自の表現に向かって行く。専門領域を拡大するため、関連分野の多方面から講師を呼び、現代社会においての自己表現のアプローチを探求するのも特徴である。

・彫刻学科
１・２年次では「人体モデリング」等を通じて“ものの見方”を修得し、「木・石･金属」各実材の基礎的技法を修得する。３・４年次では自分に適した素材を選び、自由制作等を通じてより高度な制作に臨む訓練を行う。特別講義や課外講座を通し「自己表現の確立」を目指すのも特徴である。

・工芸学科
１年次では「陶」、「ガラス」、「金属」の基礎的な素材の扱いを体験し、作品制作の基本プロセスを学ぶ。２年次からは自分に適した素材を選び、基礎的技法を修得する。３・４年次では各素材を組み合わせたミクストメディア（複合材造形）の作品制作を行う機会も設け幅広い表現力を養うなど、より高度な制作を行う。

レクチャー、ディスカッション、レポートを通してつくることの意味を論考するのも特徴である。

・グラフィックデザイン学科

１・２年次では、基礎造形（デッサン、色彩・構成）等を通じ「手」による表現力の修得の後、写真撮影技術、コンピュータ操作によるデジタル技術など「機械」による技術の修得を必修で学ぶ。３・４年次では、広告、伝達、表現の各コースを選択し計画立案と制作実習により深い専門の知識、技能を修得する。

また１・２年次で基礎を徹底的に修得した後に、３・４年次で産官学共同研究など取り入れることで、実践的な専門教育を行っているのも特徴である。

・生産デザイン学科プロダクトデザイン専攻

１・２年次ではパッケージデザイン、ゲーム、からくり、動く造形作成などシンプルな問題を設定して造形表現の基本的な進め方を学ぶ。３・４年次では課題制作を通して、基礎知識、スケッチ、模型制作技術などを修得し、コンセプトワークを理解する。また、ＣＡＤや３ＤＣＧなどのコンピュータによる表現技術を学び、基本的なプロダクトデザインの手法を修得する産学官共同研究などを通して、将来のデザインの在り方や製品開発の方向性などの問題を研究し、統括的な演習を行っているのも特徴である。

・生産デザイン学科テキスタイルデザイン専攻

１・２年次では造形の基礎と繊維素材に親しみ、テキスタイルの特性を学び、基礎的な染・織の技法を学び表現に至る技術的能力を修得する。３・４年次では染織技術と思考の追求および身体や生活環境との関係を理解し創作を行うとともに、産学共同研究への参加などを通して実社会におけるテキスタイルの現状を幅広く学び、より専門的な創作の可能性を探求して行く。

・環境デザイン学科

１年次では、光と素材と構造を通じて、身体的、空間的スケールなど、環境デザインの基礎を学び、２・３年次では、「インテリア」「建築」「ランドスケープ」の各コースに所属し、より専門的に学ぶ。産官学共同研究や学外発表の機会を多く与え、プレゼンテーション能力の育成に積極的である。４年次では学生自らがテーマを設定し、問題を見つけて、デザインしていく能力を身につけることを目指している。

・情報デザイン学科

「情報芸術コース」、「情報デザインコース」の何れかに所属する。

１年次には、情報デザインやメディア芸術の広がりと問題の深さを知り、課題制作を通じて映像音響表現やインタラクション表現の基礎を修得する。２・３年次のワークショップ演習によって、１年次で修得したスキルや感覚を有機的に発展させ、作品制作に必要なプランニングやフィールドワークの手法を身につける。４年次には、実社会のテーマに基づいたプロジェクトで総合的な制作を実践し、高い目標を設定して必要なスキルやスケジ

ュールをマネージメントする。展覧会やコンペ応募などを通して、展示や発表から評価流通まで、作品を社会的に展開することも特徴である。

・芸術学科
本学で唯一の理論系の学科である。芸術学の全領域を示すために、縦軸に８部門（芸術と宗教、都市とキュレイトリアル、美術と鑑賞、映像と身体、言語と自然、意識とアーカイヴ、デザインと美術文明史、美術史とモダニティ）を明確化し、横軸に研究者志向から専門職志向までに対応する４種の授業形態を組み、格子状カリキュラムを構成している。また、美術史部門を基礎から専門までつらぬく単独の軸としている。１年次では「基礎連鎖講座」で基礎力のレベルを上げ、諸領域を見渡すことを目指す。また「芸術学英語」で外国語と芸術学を同時に、かつ自然に学習する習慣を身につける。３・４年次では、各自に合った部門や科目を構成して履修し、専攻を深め、独自のフィールドをひらく。

【造形表現学部】

・造形学科
１年次では石膏、静物、人体等のデッサン、材料研究等により基礎的な表現力を修得する。２年次では１年次の延長として絵画制作を行い、基礎的な造形力を高め独創的な表現を探る。３・４年次では自由制作等を通じて主体性をもって創作することにより、個性的な表現を追求する。コンクール形式の展覧会「アート 45」を通し、作品制作から発表までのプロセスを学び、独立した作家としての能力を養成することも特徴である。

・デザイン学科
ビジュアル、デジタル、プロダクト、スペース、映像の５つの専門デザイン分野に基づき、デザイン全体の幅広い可能性を学ぶことができる。１・２年次ではデザインの多様なジャンルと社会における意義を理解し、基礎的制作力を修得する。デザインに必須のコンピュータ技能を学び、プレゼンテーション力を重視して制作作品の発表と講評を必ず実施する。２年次後期から各専門領域に分かれ、社会の第一線で活躍している講師陣により、生きた現場の動向･ノウハウを学ぶ。各専門領域での学習・制作を進め、課題制作を通して高度な専門知識、プランニング力、技能を修得して行く。

・映像演劇学科
「表現活動（FIELD TRIAL)」「講義学習（STUDY)」「技術修得（METHOD)」の３つの授業群がある。１年次は各授業群の基幹科目が必修。２年次以降は各授業群から科目を選択して履修。「技術修得」群では、機器機材を操る技術と表現技法を学ぶ。「講義学習」群では映像と演劇の基礎理論と歴史を学ぶ。「表現活動」群では、企画立案から、作品制作とその公開を行う。自らの表現方法を探り制作を通じて、企画提案力や組織運営力等、総合的な人間力を高めていく。４年次には集大成としての「卒業制作」を課す。

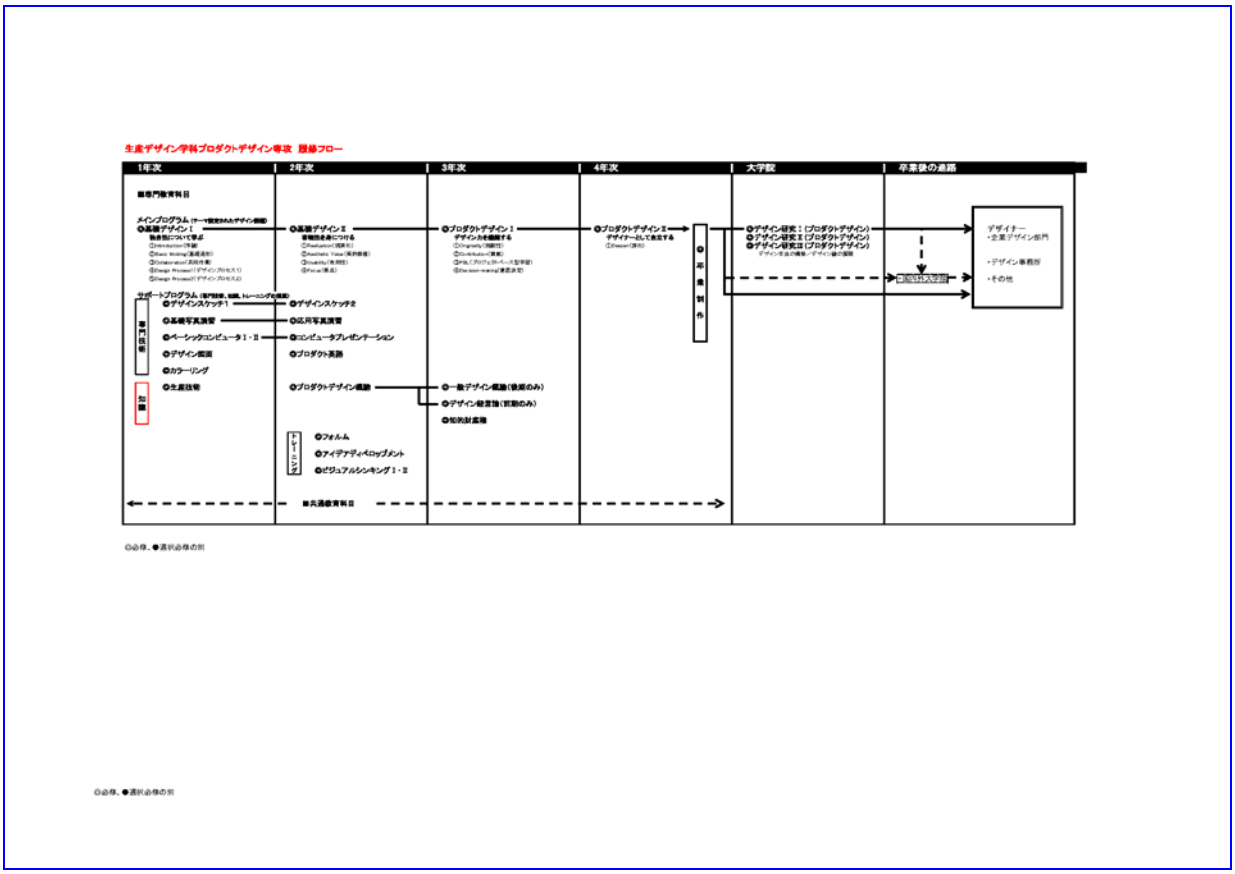
ロ．カリキュラム体系

適用	記述に係る主要点検・評価項目
大学・学部	Ａ群：学部・学科等の理念・目的や教育目標との対応関係における、学士課程としてのカリキュラムの体系性

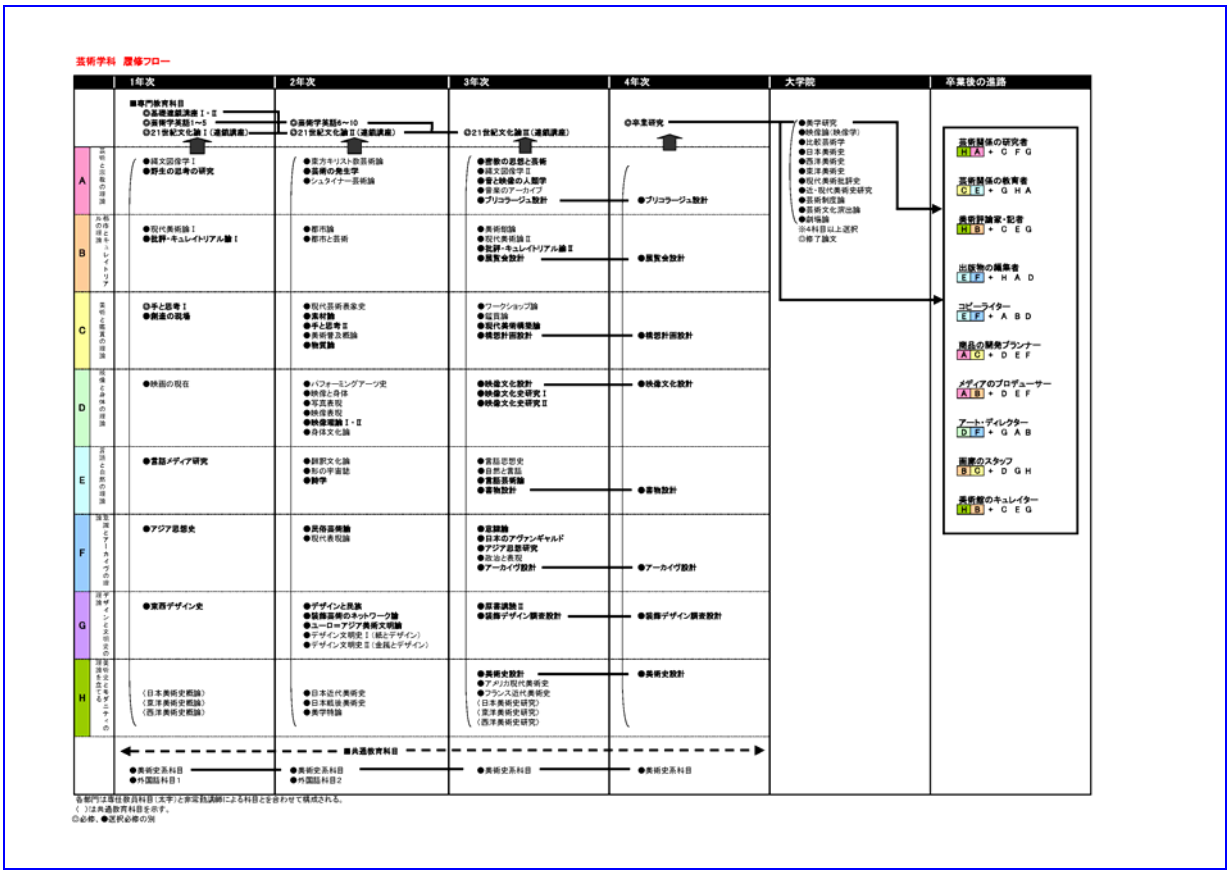
学科等の開設する「専門教育科目」は、カリキュラム・ポリシーに基づき体系的に組まれている。専門教育のなかには、学年ごとに進級要件科目を置き、これらを主要科目とし、周辺に選択科目・自由科目を配置している。必修科目・選択必修科目は、基本的に履修年次が指定され、学年ごとに段階的に学べるよう配置している。

また、それぞれの特殊性に応じて、２年次または３年次への進級時にコースや専門領域を選択する学科等がある。各自の将来目標や進路選択にあわせ、授業科目を履修する体系を採っている。

この体系性を理解した上で学習に臨むことが重要であると考え、カリキュラム・ポリシーを策定する（Ⅱ-一．理念・目的・教育目標 P.9-11 参照）とともに、さらに詳しい履修フローを策定している。学生だけでなく受験生に対しても理解を高めるためにホームページで公開している（http://tamabi.ac.jp/prof/curriculum.htm）。なお、履修フローイメージについては、図Ⅱ-三-1・2 参照（各フローの内容については上記 URL 参照）。



（図Ⅱ-三-1　履修フロー・ﾌﾟﾛﾀﾞｸﾄ）



（図Ⅱ－三－2　履修フロー・芸術学科）

c．教養・総合教育のカリキュラム

適用	記述に係る主要点検・評価項目
大学・学部	Ａ群：教育課程における基礎教育、倫理性を培う教育の位置付け Ｂ群：一般教養的授業科目の編成における「幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養」するための配慮の適切性 ：基礎教育と教養教育の実施・運営のための責任体制の確立とその実践状況

「専門教育」が“縦軸”であるなら、「共通教育カリキュラム」は専門教育で修得した知識をより広げる“横軸”として幅広い知識を修得することを目標としている。

イ．共通教育カリキュラムの開講状況

【美術学部】

美術関係の諸分野だけでなく哲学や、宗教学、経済学、科学などの分野にも亘る授業科目を開講している。また、コミュニケーションを深め、諸外国の分野に触れるために必要な英・仏・独・伊・中・韓などの語学の授業も開講している。

その他、心身の健康を維持し高める保健体育科目、教師を志す学生のための教員免許状（免許状種類については本区分 P.74-75 参照）の取得、および美術館・博物館の学芸員を目指す学生のための学芸員資格の取得に必要な科目を開講している（表Ⅱ-三-3 参照）。

外国語科目	英語／仏語／独語／伊語／日本語／英語上級／英語会話中級／英語会話上級／仏語会話／伊語会話／中国語／韓国語／English in Design
スポーツ科目	スポーツ文化論（保健体育理論）／スポーツ（体育実技）／シーズン・スポーツ
共通基礎教育科目	哲学／倫理学／現代哲学／心理学／芸術心理学／造形心理学／歴史学／日本文化史論／文学／英語原書講読／仏語原書講読／独語原書講読／美学概論／美学／考古学／音楽（20 世紀、アラブ）／社会学／法学／経済学／文化人類学／民俗学／博物学／社会思想史／芸術と科学／物理学／数学／生物学／自然・環境研究／図学／日本美術史概論／東洋美術史概論／西洋美術史概論／宗教学（聖書の世界）／人間工学／色彩論／芸術材料学／素材としての和紙作り／近代デザイン史／染織史／文様史／写真論／社会心理学／マスコミ心理学／映像メディア論／情報論／情報工学演習（コンピュータ基礎、情報機器の操作、３ＤＣＧ、描画）／総合講座デザイン論／憲法／現代工芸論／服飾文化論
共通専門教育科目	映像論／芸用解剖学／書体表現論／20 世紀美術論／漫画文化論／文化財学／日本美術史研究（彫刻史、室町絵画史研究、近現代日本絵画史、近世絵画史）／東洋美術史研究／西洋美術史研究／画像工学／知的財産論／造形演習／工芸制作／デザイン史／図法・製図／表現と素材論／芸術材料学概論／西洋彫刻史／東アジア彫刻史／現代美術／イスラム文化論／韓国文化史
ゼミナール	哲学ゼミ／歴史ゼミ／文学ゼミ／自然科学ゼミ／教育ゼミ（生涯学習、造形教育）／心理学ゼミ／音響構成論ゼミ／スポーツ文化ゼミ／西洋美術史ゼミ／現代美術ゼミ／デザイン論ゼミ／映像論ゼミ／版画ゼミ／文様研究ゼミ／日本美術史ゼミ／東洋美術史ゼミ／構想計画ゼミ／芸術材料学ゼミ
教職課程科目（芸術学科は除く）	教職論／教育基礎論／道徳教育の研究／教育心理学／教育方法論／生徒指導の研究／特別活動の研究／進路指導（相談を含む）の研究／美術科教育法基礎／美術科教育法／工芸科教育法／情報科教育法／絵画（教職絵画）／デザイン（教職デザイン）／総合演習／教育実習／介護等体験
学芸員課程科目	教育基礎論／博物館学／視聴覚メディア論／生涯学習概論／博物館実習

（表Ⅱ-三-3　美術学部共通教育科目・2007 年度）

【造形表現学部】

総合講座、基礎理論、外国語、生涯スポーツなどの科目群から成っている。

自然や社会と人間との関係を多角的に捉えることを目的とした総合講座、哲学、文学、語学、芸術・デザイン理論を学び幅広い視野を獲得することを目的とした基礎理論、学芸員資格の取得に必要な科目から構成されている（表Ⅱ-三-4 参照）。

外国語科目	英語／特英原書講読／仏語／伊語／韓国語
生涯スポーツ	生涯スポーツ（ゴルフ、テニス、ソシアルダンス、ニュースポーツ、ボーリング）
総合講座科目	芸術と哲学／美と芸術／民族音楽学概論／日本文化論／東アジアの美術／美術ジャーナリズム論／影像と芸術／文学と美術／人間関係と芸術／現代社会とコミュニケーション／芸術家と法律／現代社会と経済／思想と表現／社会と芸術／芸術と科学／生物と芸術／健康科学と社会生活／社会学特論／宗教学／アメリカ文化史／特講／宗教と芸術／西洋美術と聖書／時代と造形
基礎理論科目	日本美術史／西洋美術史／東洋美術史／現代美術／絵画理論／色彩論／デザイン基礎論／コンピュータ基礎論／ネットワーク基礎論／視覚伝達論／劇場文化史／映像形態論／上演芸術史／写真表現史／映像表現史／特講／コンピューター画像処理論／空間演出論
学芸員課程科目	博物館学／博物館学各論／視聴覚教育メディア論／生涯学習概論／博物館実習／教育学概論

（表Ⅱ-三-4　造形表現学部基礎教育科目・2007 年度）

【オープン科目】

美術学部では、教養・総合教育の提供方法の一つとしてオープン科目を開設している。オープン科目は「専門教育科目」のうち、講義科目の一部を所属学科等以外の学生が履修可能な制度である。

各学科等の専門性が非常に高いため、所属学科等以外の幅広い教育の機会に配慮している。所属学科等以外で履修した「専門教育科目」を「共通教育科目」として卒業要件単位として認定される（表Ⅱ-三-5 参照）。

学科等	オープン科目（単位数）
グラフィックデザイン学科	印刷概論Ⅰ(2)／印刷概論Ⅱ(2)／グラフィックデザイン学原論(4)／ビジュアルデザイン論Ⅰ(2)／ビジュアルデザイン論Ⅱ(2)／広告史(4)／広告コンセプト(4)／広告表現論(4)／広告コピー論(2)
生産デザイン学科 テキスタイルデザイン専攻	繊維材料学(2)／テキスタイルプロダクト論(2)／テキスタイルデザインマネージメント(2)／繊維組織学Ⅰ(2)／繊維組織学Ⅱ(2)／テキスタイルテクノロジー論(2)
環境デザイン学科	都市デザイン論(4)／環境デザイン概論(4)／世界建築史Ⅰ(2)／

学科等	オープン科目（単位数）
環境デザイン学科	世界建築史2Ⅱ(2)／空間デザイン論(4)／日本建築史(4)／現代空間論(4)／環境問題論(4)／構造デザイン論(4)／造園学(4)／エコロジカル・プランニング(2)／情報化建築論(2)／現代建築家論(4)／20世紀建築文化論(4) ／民俗建築論(2)
情報デザイン学科	メディア映像論Ⅰ(2)／メディア映像論Ⅱ(2)／メディア言語論(2)／メディア芸術論Ⅰ(2)／メディア芸術論Ⅱ(2)／メディア芸術史(2)／メディア教育論(2)／メディア起業論(2)／パフォーミング・アーツ(2)／インタラクティブ・アート(2)／サウンド・アート(2)／バイオ・アート(2)／デザイン方法論(2)／情報システム論(2)／現象学とデザイン(2)／認知科学とデザイン(2)／コミュニティとデザイン(2)／放送と通信のデザイン(2)／ヒューマンインタフェース(2)／タイムベースドデザイン(2)／インタラクションデザイン(2)／メディアデザイン(2)／デザインマネージメント(2)／情報と職業(2)／情報社会(2)
芸術学科	野生の思考の研究(2)／芸術の発生学(2)／言語芸術論(2)／詩学(2)／映像理論Ⅱ(2)／アジア思想史（2）／縄文図像学Ⅰ(2) ／縄文図像学Ⅱ(2)

（表Ⅱ-三-5　オープン科目・2007年度）

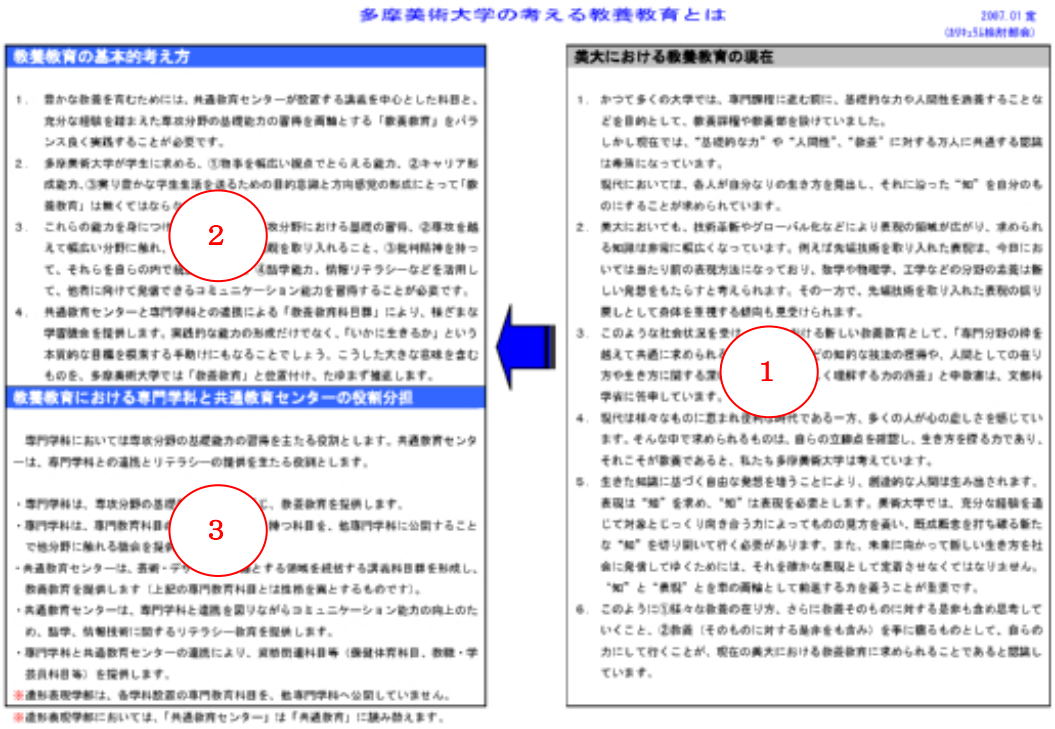
ロ．より良い「共通教育カリキュラム」へ

学科等の意思の疎通をはかるために、毎月定期的にカリキュラム委員会を開催している。「共通教育カリキュラム」についてもカリキュラム委員会により審議される。

カリキュラムに関する各学科等や教員個々の意見は、各学科等の代表者によるカリキュラム委員を通じて委員会に伝えられ審議される。「共通教育カリキュラム」についても、全体の中での妥当性が審議され、共通教育センターがその実施にあたっている。

例えば、2007年度より履修者が５名以下の選択科目及び自由科目は、原則として当該年度は不開講とすると言う基準を作成した（「共通教育カリキュラム」だけでなく専門教育科目も適用する）。履修者が極めて少ない授業は、欠席者が多い日は出席者が１～０名の場合があり、正常な授業が行えない等、教育上の課題が生じている。このように科目のあり方を常にカリキュラム編成の改善に繋げていこうとする責任体制を構築し、「共通教育カリキュラム」もその枠組みで審議される。

また、より高いレベルで教養・総合教育のあり方の審議も行っている。教養・総合教育の重要性が叫ばれている昨今、その重要性を鑑み、本学における教養・総合教育の位置付けを再確認し、魅力ある教養・総合教育の推進に取り組んでいる。次に掲げるのは 2007年１月に教育充実検討委員会・カリキュラム検討部会において定めた本学の教養・総合教育のあり方である（図Ⅱ-三-3参照）。



（図Ⅱ-三-3　教養チャート）

図中の「①」では“美大における教養教育の現在”として教養・総合教育を取り巻く現状認識が語られ、「②」では“教養教育の基本的考え方”として本学における教養・総合教育への考え方を示している。「③」では“教養教育における専門学科と共通教育の役割分担”として、教養・総合教育の責任体制を共有した。全文は次のとおりである。

①

【美大における教養教育の現在】

1．かつて多くの大学では、専門課程に進む前に、基礎的な力や人間性を涵養することなどを目的として、教養課程や教養部を設けていました。

しかし現在では、“基礎的な力”や“人間性”、“教養”に対する万人に共通する認識は希薄になっています。

現代においては、各人が自分なりの生き方を見出し、それに沿った“知”を自分のものにすることが求められています。

2．美大においても、技術革新やグローバル化などにより表現の領域が広がり、求められる知識は非常に幅広くなっています。例えば先端技術を取り入れた表現は、今日においては当たり前の表現方法になっており、数学や物理学、工学などの分野の素養は新しい発想をもたらすと考えられます。その一方で、先端技術を取り入れた表現の揺り戻しとして身体を重視する傾向も見受けられます。

3．このような社会状況を受け、大学における新しい教養教育として、「専門分野の枠を越えて共通に求められる知識や思考法などの知的な技法の獲得や、人間としての在り方や生き方に関する深い洞察、現実を

	正しく理解する力の涵養」と中教審は、文部科学省に答申しています。 4．現代は様々なものに恵まれ便利な時代である一方、多くの人が心の虚しさを感じています。そんな中で求められるものは、自らの立脚点を確認し、生き方を探る力であり、それこそが教養であると、私たち多摩美術大学は考えています。 5．生きた知識に基づく自由な発想を培うことにより、創造的な人間は生み出されます。表現は“知”を求め、“知”は表現を必要とします。美術大学では、充分な経験を通じて対象とじっくり向き合う力によってものの見方を養い、既成概念を打ち破る新たな“知”を切り開いて行く必要があります。また、未来に向かって新しい生き方を社会に発信してゆくためには、それを確かな表現として定着させなくてはなりません。“知”と“表現”とを車の両輪として前進する力を養うことが重要です。 6．このように①様々な教養の在り方、さらに教養そのものに対する是非も含め思考していくこと、②教養（そのものに対する是非をも含み）を手に宿るものとして、自らの力にして行くことが、現在の美大における教養教育に求められることであると認識しています。
②	【教養教育の基本的考え方】 1．豊かな教養を育むためには、共通教育センターが設置する講義を中心とした科目と、充分な経験を踏まえた専攻分野の基礎能力の習得を両軸とする「教養教育」をバランス良く実践することが必要です。 2．多摩美術大学が学生に求める、①物事を幅広い視点でとらえる能力、②キャリア形成能力、③実り豊かな学生生活を送るための目的意識と方向感覚の形成にとって「教養教育」は無くてはならないものです。 3．これらの能力を身につけるためには、①専攻分野における基礎の習得、②専攻を越えて幅広い分野に触れ、積極的にその価値観を取り入れること、③批判精神を持って、それらを自らの内で統合すること、④語学能力、情報リテラシーなどを活用して、他者に向けて発信できるコミュニケーション能力を習得することが必要です。 4．共通教育センターと専門学科との連携による「教養教育科目群」により、様ざまな学習機会を提供します。実践的な能力の形成だけでなく、「いかに生きるか」という本質的な目標を模索する手助けにもなることでしょう。こうした大きな意味を含むものを、多摩美術大学では「教養教育」と位置付け、たゆまず推進します。
③	【教養教育における専門学科と共通教育センターの役割分担】 専門学科においては専攻分野の基礎能力の習得を主たる役割とします。共通教育センターは、専門学科との連携とリテラシーの提供を主たる役割とします。 ・専門学科は、専攻分野の基礎教育の充実を通じ、教養教育を提供します。 ・専門学科は、専門教育科目のうち教養的側面を持つ科目を、他専門学科に公開することで他分野に触れる機会を提供します。 ・共通教育センターは、芸術・デザインを主軸とする領域を統括する講義科目群を形成し、教養教育を提供します（上記の専門教育科目とは性格を異とするものです）。 ・共通教育センターは、専門学科と連携を図りながらコミュニケーション能力の向上のため、語学、情報技術に関するリテラシー教育を提供します。 ・専門学科と共通教育センターの連携により、資格関連科目等（保健体育科目、教職・学芸員科目等）を提供します。 ※造形表現学部は、各学科設置の専門教育科目を、他専門学科へ公開していません。

ｄ．外国語科目の編成

適用	記述に係る主要点検・評価項目
大学・学部	Ｂ群：外国語科目の編成における学部・学科等の理念・目的の実現への配慮と「国際化等の進展に適切に対応するため、外国語能力の育成」のための措置の適切性 Ｃ群：グローバル化時代に対応させた教育、倫理性を培う教育、コミュニケーション能力等のスキルを涵養するための教育を実践している場合における、そうした教育の教養教育上の位置付け

専門職業人、独立した作家として国際的に活躍できる人材育成が本学の教育目的である。美術・デザイン領域においては、必ずしも言語のみによりコミュニケーションが成立する訳ではない。専攻領域に応じて外国語教育を柔軟に行うことを目標としている。

共通教育科目のなかに外国語科目を開講している。美術学部は、英語・フランス語・ドイツ語・イタリア語・中国語・韓国語・日本語（留学生対象）の７語種を開講している。造形表現学部は、英語・フランス語・イタリア語・韓国語の４語種を開講している。

実践的能力修得のため、ネイティブ・スピーカーの教員を充実させている。その指導のもとに、聴き取り、会話の機会を少しでも多く持ち、受信及び発信の能力を高めている。

美術学部では、１コマ２単位を１年次に２コマ（１コマは読解を含んだ基礎語学力養成クラス、もう１コマはネイティブ・スピーカーが担当するクラス)、或は１年次に２コマと２年次に１コマを履修することを標準としている。１年次に開講するものを基礎レベル、２年次に開講するものを中位程度のレベルとしている。履修人数を均等にして教育効果を上げるため、学科等ごとにクラス指定制度を採用している。また、個々のレベルに応じて学修可能となるように、英語・フランス語・イタリア語には、会話について中級と上級のクラスを設けている。

造形表現学部では、選択科目としている。

外国語科目の修得単位数の要件は、学部・学科等の教育目標に応じてそれぞれに定めているが、主としてデザイン系の学科には選択必修科目として課している（表Ⅱ-三-6 参照)。

学部・学科等	必・選の別	外国語単位の修得要件
絵画学科日本画専攻	選択	７つの外国語科目のうち１つを選択し、２年間で６単位を修得することが望ましい。
絵画学科油画専攻	選択	
絵画学科版画専攻	選択	
彫刻学科	選択	
グラフィックデザイン学科	選択必修	７つの外国語科目のうち１つを選択し、２年間で６単位を修得する。
工芸学科	選択必修	７つの外国語科目のうち１つを選択し、１年次に４単位を修得する。
生産デザイン学科 プロダクトデザイン専攻	選択必修	
生産デザイン学科 テキスタイルデザイン専攻	選択必修	
環境デザイン学科	選択必修	７つの外国語科目のうち１つを選択し、２年間で８単位を修得する。
情報デザイン学科	選択必修	７つの外国語科目のうち１つを選択し、２年間で４単位を修得する。
芸術学科	選択必修	７つの外国語科目のうち１つ（推奨）または２つを選択し、２年間で８単位を修得する。
造形学科	選択	英・仏・伊・韓語のうち１または２つを履修することが可能。
デザイン学科	選択	
映像演劇学科	選択	

（表Ⅱ-三-6　外国語科目の単位修得要件）

外国語教育の基本的編成は以上のとおりであるが、専攻領域に応じた措置等については次の取り組みも並行して行っている。

2005 年には美術学部共通教育センターに LL 教室（Language Laboratory）を設置した。インターネットや教材ソフトを活用した授業が可能となり教育効果を高めている。この教室は授業で使用する以外にも、昼の休憩時間にアシスタント・スタッフを置いて学生に開放している。

一部の学科等では、専門教育科目として外国語を使用したり、外国人教員による授業科目を開講している。

グラフィックデザイン学科は、「English in Graphic DesignⅠ-A」、「English in Graphic DesignⅠ-B」、「English in Graphic DesignⅡ」、「English in Graphic DesignⅢ」の４科目（各４単位）を開講している。グラフィックデザインの専門的な英文資料・文献の読解が出来ること、作品のプレゼンテーションや意見交換を英語で行えることが開講の目的である。グラフィックデザイン研究者、グラフィックデザイナーの外国人非常勤講師２名が担当し、それぞれグラフィックデザインへの造詣が深く、また日本語が堪能である。

生産デザイン学科プロダクトデザイン専攻は、「プロダクト英語」（２単位）を開講している。共通教育科目の英語では学ぶことが難しいプロダクトデザイン領域に必要な専門用

語の理解や、ディスカッション能力、プレゼンテーション能力の育成を目的としている。２年次対象に週１コマ、デザイン領域を理解する外国人教員（現在は米国人建築家）が担当している。具体的には、自己紹介、制作した作品のプレゼンテーションやディスカッションなどを全て英語で行い、記述や表記力、発表力や会話力の指導を行っている。

生産デザイン学科テキスタイルデザイン専攻は、１年次必修科目の「基礎製図」を米国人が担当し、特別講義を外国人教員に依頼するなど、日常のなかで外国語能力を養い、発揮できる環境づくりをしている。

芸術学科は、専門教育科目の基礎講座の領域のなかで、英語教育を従来にないメソッドで重点化している。外国語で学習する習慣を身につけ、英語に親しむなかで芸術学も広く学べる独自の「芸術学英語」を開講している。「芸術学英語」は１～10 までのクラスがあり、１～５までを初級クラス、６～10 をより高度なクラスとして開講している。１クラス 20 名を定員とし、少人数の授業を行うことで効果的な授業形態を採っている。ネイティブ・スピーカーを含めた５名の担当教員は共に、高度な語学力とあわせて、現代美術・人類学・文学などにそれぞれ専門領域をもつ研究者である。

「高い専門性と総合性の融合」と言う教育目標から点検・評価を行うと、きめ細やかな専門教育カリキュラムと幅広い知識を修得するための共通教育カリキュラムが整備されており妥当であると評価出来る。しかし、これらの体系を明確な形で表現していなかったことが課題として挙げられた。改善方策として、2006 年 8 月に教育目標チャート、履修フローから成る「カリキュラム・ポリシー」を定めた。教員によるカリキュラム設計における体系性の意識づけ、学生・受験生等への理解の促進に有効に機能している。

また共通教育カリキュラムについては、その位置付けが正確に学内共有されていないところがあり課題として挙げられた。改善方策として、2007 年 1 月に「教養チャート」を策定し、共通教育カリキュラムの位置付け等を再構築した。

外国語教育については、「大学として求める外国語能力」に対する共通認識をより高める必要性があると考えている。改善方策として、上述した「教養チャート」において、「求める外国語能力」を定義したところである。これに続き教育充実検討委員会・カリキュラム検討部会において「カリキュラム編成に関する基本的考え方」を 2007 年 10 月に定め、これら課題に着手した（Ⅱ-十四．自己点検・評価 P.214-220 参照）。

（２）修士課程・博士課程の基本的な考え方：●

適用	記述に係る主要点検・評価項目
大学院	Ａ群：大学院研究科の教育課程と各大学院研究科の理念・目的並びに学校教育法第 65 条、大学院設置基準第３条第１項、同第４条第１項との関連 ：学部に基礎を置く大学院研究科における教育内容と、当該学部の学士課程における教育内容の適切性及び両者の関係 ：修士課程における教育内容と、博士（後期）課程における教育内容の適切性及び両者の関係 Ｂ群：「広い視野に立って清深な学識を授け、専攻分野における研究能力又は高度の専門性を要する職業等に必要な高度の能力を養う」という修士課程の目的への適合性 ：「専攻分野について、研究者として自立して研究活動を行い、又はその他の高度に専門的な業務に従事するに必要な高度の研究能力及びその基礎となる豊かな学識を養う」という博士課程の目的への適合性

【大学院美術研究科博士前期課程（修士）】
博士前期課程は、専門性をより深め、同時にジャンルを横断できる柔軟な人材を育成することを目標としている。
【大学院美術研究科博士後期課程（博士）】
博士後期課程は、美術創作研究と美術理論研究双方の視野を兼ね備えた学術研究の指導者、国際的に活躍する専門職業人の養成を目標としている。

ａ．博士前期課程（修士）・博士後期課程（博士）のカリキュラム編成

【大学院美術研究科博士前期課程（修士）】
博士前期課程の基本的なカリキュラム編成は、専門性を深化する「各専攻の専門科目（必修）」と、幅広い知識を修得するための「共通の専門科目（選択必修）」から編成している。これにより、高度の専門的知識と美術・デザイン分野の基礎的素養を修得することが出来る。
各専攻の専門科目については専攻により特色が異なるため、各専攻の特色を次のとおり詳述する。

絵画専攻は、日本画、油画、版画の研究領域に分かれ、それぞれに教育目標を掲げ創作を行っている。日本画は、本質を見据え、常に自由を信条とし、大胆に創造を実践し、流動的、進歩的であり、新しい日本画の発展に寄与できるための努力研究を、油画は時代に即応した美意識をもち、美の創造の確立を目指した個性的で自由闊達な造形運動を、版画は時代における版表現の意味と意義を考え、より多角的な視覚と思考により新鮮で創造的かつ作家としての発表能力を深める創作研究を目標としている。

彫刻専攻は、純粋で自由な精神から発する創造行為を人間の本質とし、それぞれの院生にある創造力を、社会と芸術のかかわりを通して、世界に通じるレベルに育成することを目的とする。

工芸専攻は、陶、ガラス、金属の各研究領域でモノをつくる動機、思想、素材の特徴と加工の意味を学び、理論と創作を総合化した結果を作品として表現する教育として展開する。

デザイン専攻は、デザイン領域の拡大と高度な専門性のニーズに応え、グラフィックデザイン、プロダクトデザイン、テキスタイルデザイン、環境デザイン、情報デザイン、コミュニケーションデザインの研究領域を設けている。これらの研究領域内にそれぞれ研究テーマやプロジェクトを立ち上げ、積極的な研究や産学官共同を通し創作活動を進めている。また柔軟な視野に立ち、各領域とのコラボレーションを積極的に進め、常に新しいデザインの可能性を模索している。

芸術学専攻は、芸術・文化の幅広い領域を、体系的に探求することを目標としている。芸術人類学研究所その他の教員による第一線の研究教育活動の実態に直接触れながら独自の研究を行い、総合性ある研究と個別に目指しうる専門性とを、高度な次元で結びつけるように促す。また、学芸員やプロデューサーなど「芸術」と「社会」との媒介者を育てるにとどまらず、「芸術」と「世界」との媒介者を育成することを目標としている。

【大学院美術研究科博士後期課程（博士）】

社会の高度化、複雑化、多様化が進展するなかで、高度の専門知識や能力を有する人材の養成が求められているとともに、学術研究の著しい進展や社会の変化に対応できる幅広い視野と総合的なパーソナリティを備えた人材の養成が求められている。時代や社会の要請に対応するために、従前より培って来た伝統的な美術教育を基盤として、今日的課題に柔軟に対応できる高度な専門性を有した人材の養成を行っている。

美術専攻（博士後期課程）は、「美術創作研究」（美術およびデザイン作品の制作・実技に関する研究）と「美術理論研究」（美術の理論や歴史に関する研究）を有機的に結びつけることで、真に現代的で創造的な、幅広い見識と指導力に富んだ人材を育成することを可能としている。博士前期課程（修士課程）が５専攻に細分化されているのに対して、特に実技系の分野が「美術創作研究」というひとつの領域に統合されている点に、本専攻の最大の特色がある。これは、近年の美術やデザインの状況が、従来の専門分野の枠を超えつつあることに対応するためである。これらにより、高度の専門的知識と美術・デザイン分野の基礎的素養を修得することが出来ると共に、従来の専門分野の枠を超えた今日的人材の育成が可能となっている。

ｂ．大学院の教育内容と学士課程との関係

学部教育が１年次を「導入教育」、２年次を「基礎教育」、３・４年次を「専門教育」と位置付けているのに対して、大学院は「高度な教育」として、両者の教育内容に連携を持たせている。

学部教育では卒業制作と自由課題を除いてクラス全員に共通の課題を課すが、大学院では学生自らが研究テーマを設定し論文の作成に至るまで独自に行うところが学部との違いである。学生自らがテーマを設定する学部の卒業制作は、学士課程の集大成であると同時に、学部から大学院での教育内容への連携の役割を果たしている。

大学院では、学部よりクラス制の色合いを濃くしている。一部の専攻を除いて、自由選択による担当教員がマンツーマンの指導体制を敷き、より専門性の高い指導が可能となっている。ゼミ制を導入して学生が自由に様々なゼミを選択しつつ、研究工房も横断的に使用できる環境を整備している。また、学部時の担当教員以外にも様々なジャンルの教員との接触を可能にし、幅広い視野に立つ考察が出来るように工夫している。講評会については専攻ごとに年に２～３回程度行われているが、進級と修了時の評価には、教員全員が採点することとしている。

学部から大学院へ進学した際に円滑に移行するための措置としては、年度始めのガイダンスの実施や各自の研究テーマの発表などを行っている。

また、産学官共同研究への参加や、学内ギャラリーでの作品展示が、学士課程から博士前期課程（修士)、博士後期課程（博士）までの教育内容に強い関連性を持たせ、節目ごとに研究発表を行う場として重要な役割を果たしている。

ｃ．修士課程と博士課程との関係

専攻領域の専門性を一層高めるのが主である博士前期課程（修士）に対し、博士後期課程（博士）は美術創作研究と美術理論研究双方の視野を兼ね備えた人材の養成を目標としている。

このため博士前期課程（修士）５専攻に対し、博士後期課程（博士）は全ての領域を包括する１専攻で組織している。

これらより、大学院美術研究科については、修士課程、博士課程共に教育目標を実現し得る専攻を設置し、かつ適切な科目が設置されていると評価出来る。なお、修了作品・論文等の指導計画については後述する（本区分 P.60-61 参照)。

（３）最大の特色（Project Based Learning）：◎

適用	記述に係る主要点検・評価項目
大学・学部	Ｂ群：授業形態と授業方法の適切性、妥当性とその教育指導上の有効性 Ｃ群：起業家的能力を涵養するための教育を実践している場合における、そうした教育の教育課程上の位置付け ：インターン・シップを導入している学部・学科等における、そうしたシステムの実施の適切性 ：正課外教育の充実度
大学院	Ｃ群：創造的な教育プロジェクトの推進状況

「自ら考え、自ら動き、自ら伝える」能力の修得を目指し、課題解決型の教育手法を実践することを目標としている。

本学の教育で最大の特色は「PBL」の教育手法を創立当初から採り入れていることである。もっとも、「PBL」と言う言葉は、創立当初からあった訳ではない。「PBL」とは「Project Based Learning（課題解決型学習）」の略であり、「学習者に実際のプロジェクトや擬似的なプロジェクトを体験させることにより、課題解決の手法や能力を修得させる育成手法」である。学内では“調査・分析・具体化・伝達”の考え方により、創立当初から教育にあたって来た。

本学の教育目的である「専門職業人、独立した作家の育成」には、“自ら考え、自ら動き、自ら伝える”能力が欠かせないと言う信条からである。

ａ．基本的な教育手法（調査・分析・具体化・伝達）

PBL 教育は次のとおり進められる。

①調査・分析

②具体化

③伝　達

①調査・分析

ある与えられたテーマ（高年次であれば自ら選択したテーマ）について、それを実現するために、そのテーマ背景、いかに実現するのか（素材や技法、表現方法等）を調査・分析し計画を立てる。その計画について、実現可能であるか等を中間発表等により指導を行う。

②具体化

修得して来た技法等を駆使し、自らの手により、作品等として具体化して行く。

③伝達

自ら計画、具体化した事柄を自分の言葉で伝えるプレゼンテーション機会を設けている。

この一連の教育手法は、ファインアート系、デザイン系、理論研究系で若干の違いはあるものの基本的に上述した流れで行われている。

科目ごと、前・後期ごと、通年など様々な形で課題が与えられ、複数課題に学生は取り組んでいる。課題を完成させた後には、プレゼンテーション能力の向上と、成績評価を兼ねて審査会・批評会を開催する。学内では「講評会」と呼ばれ、年に２～３回程度行われる。「講評会」は最も本学において特色のある取り組みであり、総合力を備えた次世代の人材を育成する大切な場となっている。教員及び学生が一同に会して研究発表や意見交換が実践され、プレゼンテーション能力の向上だけでなく、学習意欲向上の場としても機能している。座学ではない、実技・演習教育を中心とする美術大学の特色を最大に活かした教育手法である。

ｂ．PBL 教育を高める試み

【実社会とのつながり】

「課題解決」とは、自己の内なる課題解決だけでなく、社会や他者とのつながりの中で課題を解決する側面を持つ。PBL 教育を進めて行く上で必要となるのが“実社会とのつながり”である。殊に専門的職業人、独立した作家の育成を目的とする本学では必要なところである。

この必要性から産学官共同研究や特別講義などをカリキュラムに位置付けている。特別講義は通常授業の補完として、現役で活躍する企業人や著名な作家、デザイナーなどを特別講師として招き、最先端の美術・デザインを取り巻く動向や、特殊な技術を学ぶ場となっており、学生のモチベーションをさらに高めている。各学科等がこれまで実施した具体的な取り組みの一例については、次のとおりである（表Ⅱ-三-7・8 参照）。

学科等	取り組み事例
彫刻学科	各務原テクノプラザ彫刻設置事業（2005 年／鹿島建設及び岐阜県各務原市より委託研究／恒久設置）
	各務原市彫刻設置事業（2006～2007 年／岐阜県各務原市より委託研究／恒久設置）
	八王子市多摩美術大学彫刻展（2002～2007 年／八王子市・本学共催による同市内複数公共施設での作品展）
	聖路加国際病院木彫展（2001～2007 年／聖路加国際病院・多摩美術大学共催）
工芸学科	学外授業により個人作家工房や工場の見学、展覧会鑑賞を行う
	課題作品による各種学外公募展覧会への応募
生産デザイン学科 プロダクトデザイン専攻	1986 年より産学官共同研究を導入。 学部 3 年次のカリキュラムに PBL（Project Based Learning）を課題として設け、4 年間に 1 度は必ず産学官共同研究に取り組む仕組みをつくっている。 博士課程は、産学官共同研究を本来の研究と平行して進めることを条件にしている。 【2006 年度】 ・4 年「Universal Design with Robots」（(株) 東芝研究開発センター） ・4 年「TOKYO NEXT DESIGN PROJECT 2006」（TOKYO NEXT DESIGN PROJECT） ・3 年「2015・ニッポンを Redesign する！」（(株) 日立製作所） 【2007 年度】 ・院 1 年「TOKYO NEXT DESIGN PROJECT 2007」（サイテック（株）） ・4 年「Only Planet」（NOKIA） ・4 年「TOKYO NEXT DESIGN PROJECT 2007」（(株) オオニシ） ・3 年「未知と未来」30 年後の fudanghi（(株) ユニクロ） ・3 年「わ(wa)」（ケータイの未来を考えるプロジェクト）（ソフトバンク（株）） ・3 年「感動をデザインする」（(株) バンダイ） ・3 年「精密機械のパッケージデザイン（Agilent Technologies） ・2.3 年・三島桐を使ったプロダクト（福島県大沼郡三島町）
	2000 年からは、社会との連携を強化するため、産学官共同研究の成果を外部に向け積極的に発表している 【2005 年】 ・3 年「Happy Feeling?」（(株) ケンウッド）⇒AXIS ・3 年「えどがわ伝統工芸産学公プロジェクト」（江戸川区産業振興課計画係）⇒Tokyo Designers Week 【2006 年】 ・3 年「2015・ニッポンを Redesign する！」（(株) 日立製作所）⇒代官山ヒルサイドプラザ
	産学共同研究は、社会との連携や共同作業の大切さを認識させ、作品の質の向上に繋がっており、その成果は、エアーバック搭載型バイクウエア、有田焼など商品化されているケースもある。

学科等	取り組み事例
情報デザイン学科	科学技術振興事業団研究プロジェクト助成をはじめ、産業界、地域社会、行政との連携などさまざまなかたちで幅広く行う。産学研究として実施した研究プロジェクトは次のとおり。 ・「油圧ショベル用次世代インターフェースデザイン研究」（（株）小松製作所） ・「生活情報の高付加価値化と生活の自動化の研究」（（株）日立製作所ユビキタスプラットフォーム開発研究所） ・「上野動物園における学習コンテンツの構築と評価に関する研究」（（財）東京動物園協会恩賜上野動物園） ・「携帯電話およびロボットにおけるロボット型インタラクションの提案」（日本電気（株））
	専門教育科目として「メディア起業論」（2006年度までは「ベンチャー起業論」）を開講し、他学科にもオープン科目として公開している。
芸術学科	研究者養成課程として書物公刊という高い意識をもち、大学院まで一貫するカリキュラムにより、学部では学生主導で企画、展示、出版、アーカイヴ化などを行う授業が組まれ、大学院では研究・思考・思想の実現を目指す。
造形学科	公募展の仕組み、審査の様子を知るため、４年次において「アート45」というコンクール形式の展覧会を行う。審査員は全教員のほか、美術評論家をゲストに呼び、公開審査を行う。 ・2004.9.14～9.19 ・2005.9.20～9.25 ・2006.9.19～9.23
デザイン学科	３年次専門教育科目のなかの各演習課題として、または「企画マネージメント論」、「マーケティング理論」、「アイデンティティ論」などの講義科目として開講する。
映像演劇学科	１年次「今日の映像表現」、「今日の演劇表現」を開設し、学生に実際に作品を鑑賞する機会を与え、かつその作り手に直接触れる機会を与える。年間およそ９プログラムを組み、作家を教室に招いてレクチャー及び質疑応答を行う。

（表Ⅱ-三-7　社会とのつながりを目指した取り組み例）

学科等	講師	期日	講義内容
絵画学科版画専攻	松山龍雄(「版画藝術」誌編集長)	2006.6.6 2007.5.30	「版画とメディアの関係」
グラフィックデザイン学科	秋吉淳一郎（松下電器参事）	2006.7.6	今日の公共広告、企業のとりくむ環境広告　課題
		2006.7.20	「新聞広告などの制作、プレゼン・講評等
	佐藤可士和（アートディレクター）	2006.7.22 2007.7.21	「アートディレクターの新領域」
	大貫卓也（アートディレクター／客員教授）	2006.10.2 2007.10.9	
	竹中直人（客員教授）	2007.10.5	「竹中直人―映像表現の可能性」
	カリ・ピッポ（客員教授）	2007.5.1	「カリ・ピッポの表現世界」

学科等	講師	期日	講義内容
生産デザイン学科 プロダクトデザイン専攻	浜野安宏（浜野総合研究所代表取締役／客員教授）	2006.6.20	「ライフスタイルを本気で楽しむ」
	深澤直人（プロダクトデザイナー／客員教授）	2006.10.13	
		2007.10.12	「意識の中心」
	ジェームズ・ダイソン（客員教授）	2007.4.26	「デザインプロセスとそのプロトタイプ」
		2007.10.26	「ジェームズ・ダイソン　デザイントーク in 多摩美術大学」
生産デザイン学科 テキスタイルデザイン専攻	ジャック・レノー・ラーセン（客員教授） ヨシコ・イワモト・ワダ（特別講師）	2007.10.16	「世界のテキスタイル事情について」
芸術学科	四ツ谷シモン（人形作家） 小川千恵子（ドール・フォーラム・ジャパン編集長）	2006.7.22	21世紀文化論「四ツ谷シモンが語る、人形芸術の世界」
	細野晴臣（客員教授）	2006.5.13 2007.10.2 2007.10.9	21 世紀文化論「これからはじまる音楽のために」
	横尾忠則（美術家／客員教授）	2006.11.14	21世紀文化論「こんなふうに僕は絵をかいてきた」
	辻井喬（詩人・作家）	2006.12.9	21世紀文化論「ケルトの風に吹かれて」
	高木正勝（映像作家・音楽家）	2007.7.21	21世紀文化論「表現の新しい可能性　sound and image」
共通教育	高橋和義（日本通運参与）	2006.5.27 ～7.8	博物館学内実習「美術梱包について」
造形学科	田中穣（文化庁等から古美術の模写等の委嘱従事）		「古典技法・絵巻模写」

（表Ⅱ-三-8　特別講義の開催例）

【成果発表】

学内ギャラリー展示風景

PBL 教育によって生み出された教育成果を展示・発表することにより、学生の次なる意欲を引き出している。この展示・発表についても学生自らが企画し実施を行うため、ここでも“調査・分析・具体化・伝達”のプロセスを学ぶこととなる。

特に八王子キャンパスは各施設にギャラリーを設置しており（Ⅱ-七．施設・設備等 P.127 参照）、創作と発表の場が身近にあることが特徴である。また、卒業

制作発表等は学外でも積極的に行っている(Ⅱ-六.研究活動と研究環境 P.114-115 参照)。

学内ギャラリーにおける展示・発表については次のとおり例示した（表Ⅱ-三-9 参照)。なお、下表は参考までに絵画東棟ホール・ギャラリーの展示・発表状況を示した。この他、デザイン棟、絵画北棟、彫刻棟、工芸棟、テキスタイル棟、情報デザイン・芸術学棟で同様の展示企画を行っている。

期　　間	企　画　名	企　画　概　要	使用団体名
5.22～5.27	彫刻科諸材料専攻教室作品展示	彫刻棟内を離れて広く自身の作品を観てもらうことを意識して制作させることを目的とする	彫刻学科諸材料専攻
6.12～6.24	油画 4 年生グループ 1-B 展	批評会・展示	油画研究室
6.26～7.8	油画 4 年生グループ 2 展	批評会・展示	油画研究室
7.10～7.15	日本画専攻学部有志展	日本画専攻の学部生の有志による学年の垣根を越えた展示	日本画専攻学部有志
7.18～7.22	油画 3・4 年生選抜展	油画 3・4 年生選抜展	油画研究室
9.23～10.7	TAMAVIVANT2006	今日活躍するﾌﾟﾛの作家を中心とした、海老塚耕一ｾﾞﾐの学生の企画･運営によるｱﾆｭｱﾙ展	海老塚耕一ｾﾞﾐ (学部 3・4 年生、院 1 年生)
10.10～10.21	油画 4 年生グループ 3 展	批評会・展示	油画研究室
10.23～10.28	彫刻科諸材料専攻教室・大学院石井教室作品展示	客員教授の建畠晢先生を招いての作品講評会	彫刻学科諸材料専攻 3・4 年生、大学院石井教室
11.8～11.11	油画院 2　精鋭展　5　vol.1	長年の作品制作によって充実した作家としての作品を展示	油画院 2 年生
11.13～11.18	油画 4 年生グループ 1-A 展	批評会・展示	油画研究室
11.20～12.2	油画 3 年生グループ 3 展	批評会・展示	油画研究室
12.4～12.9	油画 3 年生グループ 2 展	批評会・展示	油画研究室

（表Ⅱ-三-9　絵画東棟ｷﾞｬﾗﾘｰ展示・発表状況・2006 年度）

ｃ．PBL 教育の拡がり

上述したとおり、社会との関わりを一つの材料として PBL 教育を推進して来た。しかしながら社会の高度化・複雑化に従い、専攻領域の枠内で社会との関わりを考えることは難しくなっている。そこで PBL 教育のうち、複数の領域からなるプロジェクトに関する取り組みを行っている。こうしたプロジェクトに複数学科等の学生が一緒に取り組めるように、その受け皿として「PBL 科目」と言う名称の科目を設置した（表Ⅱ-三-10 参照）。

授業科目名	単位数	授業形態	開講期
PBLⅠ-1　バナナ・テキスタイル入門－素材研究Ⅰ	1	演習	前期
PBLⅠ-2　バナナ・テキスタイル入門－素材研究Ⅱ	1	演習	後期
PBLⅡ-1　バナナ・テキスタイルデザイン	2	実習	通年
PBLⅠ-3　演習・素材と表現の関係考	1	演習	後期
PBLⅠ-4　日本画の素材とバナナ素材における研究	1	演習	後期
PBLⅡ-2　伝統とエコロジカル・デザイン	2	講義	前期
PBLⅡ-3　バナナ環境論（デザインと環境問題論）	2	講義	後期
PBLⅠ-5　メディアデザイン研究プロジェクト・前期	1	演習	前期
PBLⅠ-6　メディアデザイン研究プロジェクト・後期	1	演習	後期
PBLⅠ-7　家具の企画とデザイン	1	実習	前期
PBLⅠ-8　グッズ類の商品企画とデザイン	1	実習	後期
PBLⅠ-9　えどがわ伝統工芸産学公プロジェクト	1	実習	前期

（表Ⅱ-三-10　PBL 科目開講状況・2007 年度）

科目の開設にあたっては、各学科等の教員と教務部、造形表現学部事務部職員から構成される PBL 委員会を組織した。この委員会では、プロジェクトテーマの教育上の妥当性を精査・検討している。

PBL 科目は実習科目・演習科目・講義科目の３つから構成され、プロジェクトの遂行と成果物が要求される実習科目を中心として、講義による知識の修得を講義科目が担い、成果物やプレゼンテーションに必要な技術は演習科目が担っている。修得単位は、全学的に自由科目の単位として認定している。これら取り組みのいくつかを次に例示する。

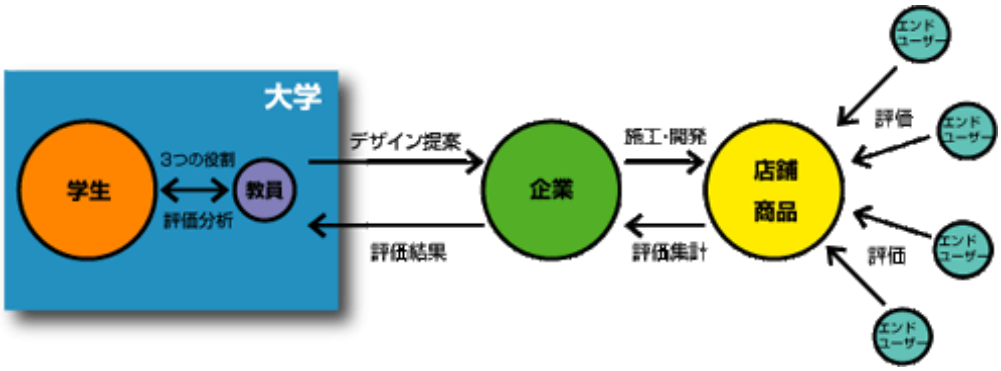
【マスマーケットへ向けたデザイン教育の実践／2005 年度特色ＧＰ選定】

教育成果を実際のマスマーケットに照らし評価することは難しく、今まで手つかずであった。しかし、多くの学生が卒業後、職業人としてマスマーケットへのデザインと言う問題に直面することになる。一方、目まぐるしく変化する価値観を先取りして、市場を開拓して行きたいと試みる企業は、次世代の価値観を担う学生の潜在能力を必要とし始めている。

デザイナーの卵として実社会の風上に控えている学生の提案は、社会的に妥当性のあるものとして企業に受け入れられ実施される。ここで初めてマスマーケットの中で、エンドユーザーの評価を受けるという仕組みが生まれる。これが地域・社会と連携した産

学官共同プロジェクトである。

このプロジェクトは広く全学的な組織に支えられ、様々な学科等の学生が参加し、履修することができる。チーム力を活かした専攻領域を越えた幅広いデザイン提案を行う、革新的なデザイン教育の取り組みである。

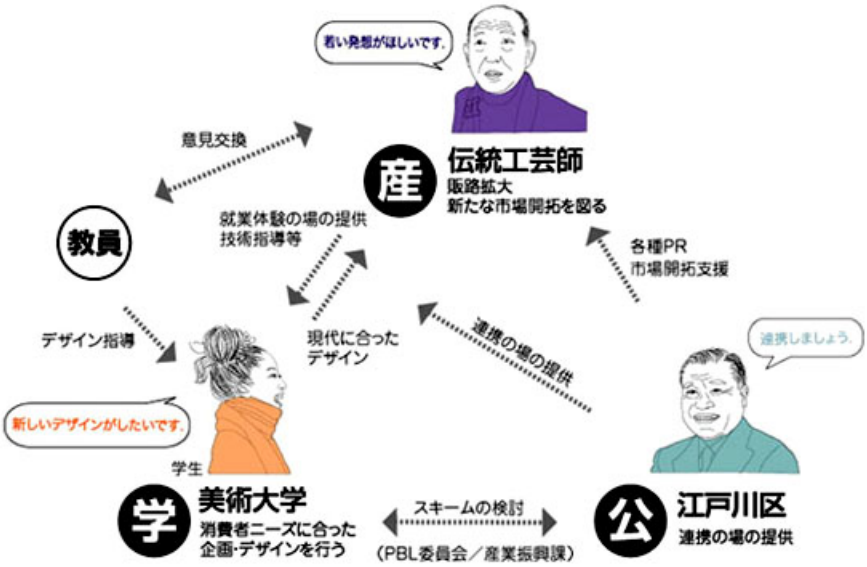


社会に提案を問い、エンドユーザーの評価がフィードバックされる

【学生プロデュースによる地域伝統工芸活性化／2005 年度現代ＧＰ選定】

伝統工芸の高度な技・文化・歴史等を学んだ上で、芸術的創造力を養う実践的教育プログラムである。本学を含めた３つの美術大学、伝統工芸師、江戸川区が連携し、伝統と若い感性が融合したデザインで地域伝統工芸活性化に貢献するプロジェクトである。

この取り組みは、学生のアイデアと工芸師の技による試作品群を一つの纏りとして捉え、江戸川区産業振興課や NPO 法人と協力しながらブランディングを行う。



その活動を通じて、伝統の後継・保存を視野に入れつつ、学生のデザインマネージメントが出来る総合的なプロデュース能力の育成を目指すものである。ひいては、江戸川区の伝統工芸の新たな価値観の構築や地域の活性化を目論んでいる。

2005 年度の秋より、成果工芸品の展示会の開催、ブランド化に向けた学生プロジェクトチームの発足、えどがわ伝統工芸センター（仮称）構想への企画提案を行い、学生の若い感性を磨き、伝統工芸師とのインタラクティブな学びあいのなかで、地域文化の活性化に資し、伝承の技と芸術的創造力を養う教育を図っている。また、外部へ向けて発信することで、広く社会からの評価を学生にフィードバックしている。

【バナナ・テキスタイル・プロジェクト／2006 年度現代ＧＰ選定】

この取り組みは、廃棄処分されているバナナの茎の再利用とデザインを融合させたバナナ布の制作システムと、作られた製品を海外諸国に紹介することで、地球環境保全に貢献することを視野に入れたものである。

地球環境問題とデザイン教育を連携させ、具体的でかつ持続可能な国際貢献の実践を学生主体で行う。美術・デザインを学ぶ学生の立場から、様々な問題を包含したグローバルな視点と総合的考察力を学び、実社会と関わりながら自らの姿勢を日常から考え行動できる力をつけることを目指している。

ウガンダ産業国務大臣が視察

ﾊﾞﾅﾅﾌｧｲﾊﾞｰﾜｰｸｼｮｯﾌﾟの様子

【Pacific Rim プロジェクト】

約 25 年に亘る交流を続けて来たアートセンター・カレッジ・オブ・デザイン（米国）と 2006 年度から「Pacific Rim」プロジェクトを開催している。

この取り組みはデザインを学ぶ学生たちが、環境保護や自然災害などグローバルな社会問題をテーマに取り上げて行う共同研究である。文化、習慣、言語、価値観の違いのなかでリサーチ、ディスカッション、デザイン作業を経て、テーマに対するコンセプトを共有し、デザイナー

として何ができるのかを提言する。

研究成果はプレゼンテーションやWEBなどを通じて全世界に発信される。参加者は両大学のグラフィックデザイン、プロダクトデザイン、テキスタイルデザイン、環境デザイン、情報デザインの分野で学ぶ学生たち各10名で、約３カ月間の滞在期間中にジャパンステージ、アメリカステージそれぞれでひとつの研究成果を纏める。

滞在期間中は各大学で特別に構成された密度の濃いカリキュラムが用意されている。テーマに関連する特別講義、受入校の関連授業への参加のほか、サポート授業として語学実習、官民の協力を得ながらの社会見学など、各国の文化と技術を学ぶユニークなプログラムが工夫されている。また留学期間中は教員同士も頻繁に開催国を訪問しながら積極的に交流が図られる。

2006年度の第１回「Pacific Rim」プロジェクトは１年間のうちにアメリカ、日本の両ステージを開催したが、2007年度からは１年ごとに両校を行き来する形となる。このプロジェクトは、2010年まで開催する。

http://www2.tamabi.ac.jp/cgi-bin/pacific_rim_2007/index.php

PBL教育は、「独立した作家、専門的職業人の育成」と言う目的を実現するため、核となる教育方法であると考えている。この試みは高く評価され「現代ＧＰ」、「特色ＧＰ」、「大学院ＧＰ」等に選定された他、一般にも広く認識されている（Ⅱ-一. 理念・目的・教育目標 P.12-13：カレッジマネジメント・募集ブランド力調査参照)。これらよりPBL教育の推進については、非常に高く評価出来る。

また、単位認定を伴わないインターン・シップを積極的に行っており（これまでの実績については、本区分 P.76-77 参照)、単なる就職活動ではない教育活動の一環としてのインターン・シップをPBL科目で行うことも検討中である。

（４）カリキュラムを支える制度：●

専門的な教育を十分確保しつつも、それを損なわない限りでの柔軟性を持つ制度を目標としている。

ａ．授業科目の量的配分

適用	記述に係る主要点検・評価項目
大学・学部	Ｂ群：教育課程の開設授業科目、卒業所要総単位に占める専門教育的授業科目・一般教養的授業科目・外国語科目等の量的配分とその適切性、妥当性 ：カリキュラム編成における、必修・選択の量的配分の適切性、妥当性

卒業要件 124 単位に占める、各学科等が開講する専門的な授業科目（専門教育科目）と全学生が共通に履修することができる共通の授業科目（美術学部では共通教育科目、造形表現学部では基礎教育科目）の単位数の量的配分および、カリキュラム編成における必修科目・選択必修科目・選択科目・自由科目の量的配分については、次のとおりである（表Ⅱ-三-11～13 参照）。

本学の教育は専門性が極めて高い。専門教育科目と共通の授業科目の単位数の量的配分に一定の柔軟性を付与することで､学科等の教育目標を十分に実現する体制を整えている。

また、専門教育科目を中心として、全学的に必修または選択必修の配分が大きくなっているのは、専門的な技能の修得と訓練に重きを置いたカリキュラム編成を行っているためである。それぞれの学科等ごとに、多くの専門教育科目は履修年次が指定され、学年ごとに段階的に学べるよう、授業科目が体系的に配置されている（本区分 P.24-25 参照）。

一方で、共通の授業科目は、教養教育、語学・情報技術に関するリテラシー教育、資格関連科目等（教職・学芸員科目、保健体育科目等）、多くの授業科目がバランスよく開講され、学生はこの中から自由に選択することができる（本区分 P.26-28 参照）。

以上のように、専門教育科目と共通の授業科目がバランスよく配置され、共通の授業科目は選択の幅が十分に確保されている。

学科等		共通教育科目 外国語科目	共通教育科目 情報工学演習	共通教育科目 ゼミ（演習）	専門教育科目	卒業要件単位合計	
絵画学科日本画専攻	必修				74	74	124
	選必・選択	20				20	
	自由	30				30	
絵画学科油画専攻	必修				70	70	124
	選必・選択	20				20	
	自由	34				34	
絵画学科版画専攻	必修				66	66	124
	選必・選択	20				20	
	自由	38				38	
彫刻学科	必修				80	80	124
	選必・選択	20				20	
	自由	24				24	
工芸学科	必修				68	68	124
	選必・選択	32	4			36	
	自由	20				20	
グラフィックデザイン学科	必修				48	48	124
	選必・選択		6		42	48	
	自由	28				28	
生産デザイン学科 プロダクトデザイン専攻	必修	4	2		94	100	124
	選必・選択	8	4			12	
	自由	12				12	
生産デザイン学科 テキスタイルデザイン専攻	必修	12			60	72	124
	選必・選択	16	4		26	46	
	自由	6				6	
環境デザイン学科	必修			2	89	91	124
	選必・選択		8		4 ＋ 4	16	
	自由	17				17	
情報デザイン学科	必修				78	78	124
	選必・選択		4		24	28	
	自由	18				18	
芸術学科	必修				26	26	124
	選必・選択	a	8		b	70	
	自由	28				28	

	※ａとｂで合計 62 単位取得する

（表Ⅱ-三-11　卒業に必要な単位数・美術学部）

学科等		基礎教育科目	総合講座科目	基礎理論科目	外国語科目	体育実技科目	専門教育科目	卒業要件単位合計	
造形学科	必修						54	54	124
	選必・選択	40	(16)	(12)			24	64	
	自由	6						6	
デザイン学科	必修						18	18	124
	選必・選択	40	(16)	(12)			64	104	
	自由	2						2	
映像演劇学科	必修						32	32	124
	選必・選択	40	(16)	(12)			48	88	
	自由	4						4	

（表Ⅱ-三-12　卒業に必要な単位数・造形表現学部）

専攻	研究領域	共通の専門科目（選択必修）	各専攻の専門科目（必修）	修了要件
絵画	日本画	8 単位以上	22 単位以上	30 単位以上※
	油画			
	版画			
彫刻				
工芸				
デザイン	グラフィック			
	プロダクト			
	テキスタイル			
	環境			
	情報			
	コミュニケーション			
芸術学				

（表Ⅱ-三-13　卒業に必要な単位数・大学院美術研究科博士前期課程（修士））

※修了の要件

共通の専門科目（選択必修）から８単位以上＋各専攻の専門科目（必修）22 単位以上＝合計 30 単位以上を修得し、さらに修士論文または修士作品を提出し、審査に合格すること。

ｂ．授業形態と単位の関係

適用	記述に係る主要点検・評価項目
大学・学部	Ａ群：各授業科目の特徴・内容や履修形態との関係における、その各々の授業科目の単位計算方法の妥当性
大学院	Ａ群：各授業科目の特徴・内容や履修形態との関係における、その各々の授業科目の単位計算方法の妥当性

授業形態は、「講義」、「演習」、「実験、実習及び実技」に分けられる。大学設置基準において、1 単位の授業科目を 45 時間の学修を必要とする内容をもって構成すること標準としているが、本学の学則では次のように規定している。

第６条　９　試験に合格したものには、その授業科目所定の単位を与える。
各授業科目に対する単位数は、次の基準によって計算する。
（イ）講義を中心とする授業については、15 時間に相当する授業時間をもって１単位とする。
（ロ）演習を中心とする授業については、15 時間から 30 時間に相当する授業時間をもって１単位とする。
（ハ）実験、実習及び実技を中心とする授業については、30 時間から 45 時間に相当する授業時間をもって１単位とする。

単位の計算方法は、全ての授業科目が大学設置基準第 21 条に準ずる学則第６条の規定に基づいている。また授業形態と単位計算の方法を、カリキュラム表に「講義―演習―実技（例：0－2－0)」と分かり易く明記しており適正であると言える。大学設置基準では各授業科目の単位数は、大学において定めるものとされているが、学則では、「演習」、「実験、実習及び実技」においては、必要とする授業時間数に範囲が示されている。

運用にあたっては、「演習」は 30 時間に相当する授業時間をもって１単位とし、「実験、実習及び実技」は 45 時間に相当する授業時間をもって１単位とすることを原則としているが、一部の「演習」については 15～30 時間、「実験、実習及び実技」は 30～45 時間に相当する授業時間をもって１単位としている。

ｃ．授業担当の状況（専・兼比率）

適用	記述に係る主要点検・評価項目
大学・学部	Ｂ群：全授業科目中、専任教員が担当する授業科目とその割合 Ｂ群：兼任教員等の教育課程への関与の状況

専任教員・兼任教員が次の考え方で授業運営にあたっている。

学部全体でみると、全開設授業科目のうち専任教員が担当している科目数の比率は、美術学部では 51.9%、造形表現学部では 56.6%である。それぞれの学部で、必修科目（必修＋選択必修）と選択科目（選択＋自由）別にみると、美術学部では必修科目 54.2%、選択科目 48.4%、造形表現学部では必修科目 55.8%、選択科目 58.6%である。

さらに、学科等別に見て行くと、その比率には相違が見られる（表Ⅱ-三-14 参照）。このように専任教員の担当比率が異なっているのは、前述のとおり各学科等がそれぞれの専門領域に応じた教育を行っていることが関係している。また、兼任教員が多いのは、専門職業人等の育成の観点から、学外から多くの作家やデザイナーを招いて、リアルタイムで多様な仕事を体感させることが不可欠であると考えるからである。

原則として、各学科等の進級要件科目など、主要な専門授業は全ての専任教員が担当し、兼任教員を適正に配置して効果的なカリキュラムを編成している。専任教員と兼任教員による共同の授業や、オムニバス授業なども開講している。なお、専任教員と兼任教員の連絡体制については「Ⅱ-五．教員組織」で記述した。

学部・学科等		科目種別	専任教員担当科目数	兼任教員担当科目数	専任教員担当科目数比率
美術学部	絵画学科	必修・選択必修	24.2	7.8	75.6%
		選択・自由	6.5	3.5	65%
		全開設授業科目	30.7	11.3	73.1%
	彫刻学科	必修・選択必修	7.9	2.1	79%
		選択・自由	－	－	－
		全開設授業科目	7.9	2.1	79%
	工芸学科	必修・選択必修	4	5	44.4%
		選択・自由	－	－	－
		全開設授業科目	4	5	44.4%
	グラフィックデザイン学科	必修・選択必修	34.1	26.9	55.9%
		選択・自由	6.3	6.8	48.1%
		全開設授業科目	40.4	33.7	54.5%
	生産デザイン学科	必修・選択必修	22	27	44.9%
		選択・自由	－	－	－

学部・学科等		科目種別	専任教員担当科目数	兼任教員担当科目数	専任教員担当科目数比率
美術学部	生産デザイン学科	全開設授業科目	22	27	44.9%
	環境デザイン学科	必修・選択必修	11.8	13.2	47.2%
		選択・自由	8	2	80%
		全開設授業科目	19.8	15.2	56.6%
	情報デザイン学科	必修・選択必修	28.2	17.8	61.3%
		選択・自由	－	－	－
		全開設授業科目	28.2	17.8	61.3%
	芸術学科	必修・選択必修	38	44	46.3%
		選択・自由	－	－	－
		全開設授業科目	38	44	46.3%
	共通教育	必修・選択必修	－	－	－
		選択・自由	80	95	45.7%
		全開設授業科目	80	95	45.7%
造形表現学部	造形学科	必修・選択必修	18.4	2.6	87.6%
		選択・自由	2	－	100%
		全開設授業科目	20.4	2.6	88.7%
	デザイン学科	必修・選択必修	22	30	42.3%
		選択・自由	5.6	2.4	70%
		全開設授業科目	27.6	32.4	46%
	映像演劇学科	必修・選択必修	9.6	13.4	41.7%
		選択・自由	5.1	7.9	39.2%
		全開設授業科目	14.7	21.3	40.8%
	共通専門教育	必修・選択必修	－	－	－
		選択・自由	－	－	－
		全開設授業科目	1	－	100%
	共通基礎教育	必修・選択必修	32	19	62.7%
		選択・自由	9	5	64.3%
		全開設授業科目	41	24	63.1%

（表Ⅱ-三-14　開設授業科目における専任教員担当科目数比率／大学基礎データ表３（改））

ｄ．単位互換と単位認定

適用	記述に係る主要点検・評価項目
大学・学部	Ｂ群：国内外の大学等と単位互換を行っている大学にあっては、実施している単位互換方法の適切性 ：大学以外の教育施設等での学修や入学前の既修得単位を単位認定している大学・学部等にあっては、実施している単位認定方法の適切性 ：卒業所要総単位中、自大学・学部・学科等による認定単位数の割合

イ．他大学等との単位互換

美術学部では、八王子学園都市大学（Ⅱ-九．社会貢献 P.149-150 参照）に共に参加する東京工科大学・創価大学、サレジオ工業高等専門学校（専攻科）と単位互換協定を締結している。

各大学は、それぞれの専門領域を活かした授業科目を提供し、この４校に在籍する学生は所属大学では開講していない特色ある授業を、履修料等免除で受講し、試験等に合格すれば単位を修得することが出来る（表Ⅱ-三-15 参照）。

他大学等との単位互換については、学生に多様な学習機会を与えることが目的の一つであり、本学における学習を最優先と考え、対象学年や１年間に履修できる単位数に一定の制限を設けている。

運用については、協定校間で交わす「八王子学園都市大学における参加大学間の単位互換に関する覚書」および「同実施要領」に基づいている。本学では２年生以上を対象として、単年度では最大８単位までを履修可能としている。それぞれの所属学科等の学修に支障がないよう、研究室の許可を得て申込むこととしている。他大学で修得した単位は、本学の成績評価基準・標示方法（Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ）に書き換えることを可能とし、共通教育科目の自由科目の単位として認定している。

単位の認定方法は、学則第６条の２に則り、他大学等における学修を幅広い教養を深めるものと考え、本学における専門教育科目の領域ではなく、共通教育科目の領域のなかで認定しており、これらは適正に行っていると考えている。

さらに、この単位互換協定は、2007 年 9 月に新たに東京家政学院大学・ヤマザキ動物看護短期大学が加盟し、６校で実施することとなった。

造形表現学部については、他大学との単位互換は行っていない。

		2005 年度			2006 年度				2007 年度			
		多摩美術大学	創価大学	東京工科大学	多摩美術大学	東京工科大学	創価大学	サレジオ高専	多摩美術大学	東京工科大学	創価大学	サレジオ高専
開設大学	多摩美術大学		21	4		102	4	5		45	0	2
	東京工科大学	87		19	0		0	5	1		0	0
	創価大学	2	2		0	23		2	0	7		0
	サレジオ高専 専攻科				2	13	0		0	10	0	

（表Ⅱ-三-15　単位互換履修者数）

※サレジオ工業高等専門学校は 2006 年度より実施。

※創価大学は、麻疹により 2007 年度前期の実施を取止め。

ロ．外国の大学との単位互換

美術学部、造形表現学部では、交流協定のある７つの海外教育機関のうち、ヘルシンキ芸術デザイン大学（フィンランド）とは 2002 年より、弘益大学校（韓国）とは 2005 年より交換留学制度を設けている。受入・派遣期間は原則として１学期間（半年間）である。留学前に承認を受けた科目については、本学で修得すべき授業科目の単位として認定される（表Ⅱ-三-16 参照）。

	ヘルシンキ芸術デザイン大学		弘益大学校	
	受入	派遣	受入	派遣
2002 年度	0	1		
2003 年度	0	1		
2004 年度	1	1		
2005 年度	2	1	1	0
2006 年度	2	1	2	1
2007 年度	2	2	2	1

（表Ⅱ-三-16　受入・派遣実績）

ハ．他大学等の履修における単位認定

他大学を卒業または中途退学した者、短期大学、高等専門学校を卒業した者などが本学に入学した場合、既修得単位の取扱いについては、学則により単位認定を行っている。

第６条の２　　本学入学前に大学、短期大学で修得した単位（科目等履修生として修得した単位を含む）又は高等専門学校の専攻科における学修、その他文部科学大臣が別に定める学修について、教授会の議を経て 60 単位を越えない範

囲で本学において修得した単位として認定することができる。

第６条の３　学生が本学在籍中に本学の定めるところにより、国内外の他大学、短期大学において修得した単位又は高等専門学校の専攻科における学修、その他文部科学大臣が定める学修について、教授会の議を経て第６条の２により認定した単位と合せて 60 単位を越えない範囲で、本学において修得した単位として認定することができる。

学習機会が多様化し、本学においても３年次編入学など、様々な学修履歴のある学生が入学している。

美術学部の単位認定の手順については、学生が提出した「成績証明書」により授業科目名、単位数などを本学の教育課程における授業科目と照合し、単位認定資料（案）を作成する。単位認定にあたっては、授業内容が重要となるため、当該大学の履修案内、シラバス等の提出を求める場合がある。作成された単位認定資料（案）は、４月の第１週目に開催される教務主任会議に提案され、各学科等の教員がそれぞれに持ち帰って再度審査をして、教授会の議を経て認定を行っている。

造形表現学部では、単位認定について基本的考え方と運用ルールを定めており、単位数に応じて基礎教育科目（総合講座科目・基礎理論科目・外国語科目・体育実技科目）として認定している。

①大学卒業及び３年次までに 93 単位以上修得した者：44 単位まで認定

②短期大学・高等専門学校専攻科を卒業及び２年次までに 62 単位以上修得した者：30 単位まで認定

③１年次までに 31 単位以上修得した者：14 単位まで認定

他大学との単位互換、他大学等における既修得単位の認定については、基礎教育科目についてのみ認めている（３年次編入除く）。本学で学ぶべき専門教育は必ず課すこととしているため、妥当な制度と言える（交換留学除く）。

カリキュラムを支える制度については、上記ａ～ｄで詳述したとおり妥当であると評価出来る。より制度を磐石にすると言う観点から点検・評価するのであれば、次の２点については検討課題を見出すことが出来る。

①「ｂ．授業形態と単位の関係」について

単位の計算方法が幅を持って定義されており、明確な定義により適切性を高める必要がある。

②「ｄ．単位互換と単位認定」について

「文部科学大臣が別に定める学修」に係る単位認定について、個別対応としている。認定基準を策定し、より適切性を高める必要がある。

改善方策として、①ついては 2007 年 10 月にカリキュラム検討部会において「カリキュラム編成に関する基本的考え方」を定め、問題認識を顕在化する取り組みを行った（Ⅱ－十四．自己点検・評価 P.214-220 参照）。この方針に基づき、分かり易い運用基準を設ける等、授業時間と単位の計算方法の妥当性をさらに高める措置を検討している。

また、②については文部科学大臣の認定する技能審査の認定等、単位認定の弾力化に係

る検討を行って行きたい。

（５）魅力を引き出すためのサポート：●

カリキュラムを支える制度の趣旨を十全に伝え、魅力を引き出すサポート体制の構築を目標としている。

ａ．履修指導等

適用	記述に係る主要点検・評価項目
大学・学部	Ａ群：学生に対する履修指導の適切性 Ｂ群：オフィスアワーの制度化の状況 ：留年者に対する教育上の配慮措置の適切性 Ｃ群：学習支援（アカデミック・ガイダンス）を恒常的に行うアドバイザー制度の導入状況
大学院	Ａ群：学生に対する履修指導の適切性

イ．学習指導

【新入生に対する指導】

美術学部、大学院美術研究科では、新入生に対する学習指導及び履修指導を、入学式当日の午後から授業開始日までの４日間にオリエンテーションの一環として行っている（表Ⅱ-三-17・18 参照）。

事務部門で行うオリエンテーションでは、「履修案内」、「シラバス」等を参照しながら、教育理念、教育目標、学則、履修、単位、学事日程、授業期間、授業時間、進級・卒業要件、試験、成績評価など、学習を行う上で必要な事項について説明を行う。

さらに研究室で行うオリエンテーションでは、学科等別に実施され、各学科等の理念、教育目標、学修内容、進級・卒業の要件などについての説明、ならびに教員紹介などを行う。学生生活には不可欠な実技教室やアトリエ、あるいはキャンパス全体の案内なども行っている。本学では、一般的なクラス担任制度とは異なるが、学生が所属する研究室において、教員、助手、副手が連携してアドバイザーの役割を果たしており、履修から学生生活に至るまできめ細やかな指導にあたっている。

学生の相談内容や問題点については、各学科等の教務主任やカリキュラム委員、事務職員が出席する会議において報告がなされ、次年度以降の指導に活かしている。

学生はオリエンテーションを経て、各自が１年間の履修計画を立て、授業時間割に従って履修を開始する。美術学部で 2007 年に導入された「WEB シラバス」には、授業のねらい、展開計画、履修上の注意事項と共に評価方法などが記載され、授業選択に必要な情報を得

ることが出来る。また、同年内に新たに導入された「教員業績公開システム」も、教員情報を詳細にインターネットに公開し履修指導の効果を高めている。

月 日	内 容	対 象
4.6	入学式 研究室オリエンテーション	全員（学科等別）
4.7	共通教育オリエンテーション 事務各課オリエンテーション 教職・学芸員課程オリエンテーション	全員 全員 資格取得希望者
4.9	（学生生活・奨学金説明会）	全員
4.10	（健康診断） 履修登録ガイダンス	全員 学科等別
4.11	授業開始 ※必修科目、語学などクラス指定の授業を除き、自由に出席する	全員
4.11～4.19	履修登録 PC 入力期間 履修相談窓口開設 ※終日会議室にて教務部スタッフを 2 名配置し、終日個別に対応	個別
4.19	履修登録 PC 入力期限（20 日：午前 0 時）	個別
4.27	履修登録確定日、PC 確認日	個別

（表Ⅱ-三-17　オリエンテーション日程・2007 年度・美術学部 1 年）

月 日	内 容	対 象
4.7	入学式 共通教育ガイダンス 各学科ガイダンス（研究室）	全員
4.10	事務ガイダンス、図書館ガイダンス 博物館学芸員ガイダンス 他学部履修（教員免許状取得）ガイダンス （社会人学生授業料減免説明会）	全員 資格取得希望者 資格取得希望者 社会人入学者
4.11	前期授業開始	全員
4.13	（奨学金説明会）	希望者
4.13～4.19	履修科目登録期間＜WEB 登録＞ ※学内のコンピュータルームで入力する 　入力についての質問は事務職員が終日個別に対応	個別
4.19	履修科目登録＜マークシート登録＞ ※事務職員が記入についての説明をしながら登録する	個別
4.26	履修登録確認 ※登録した科目を履修登録確認表で確認する	全員

（表Ⅱ-三-18　オリエンテーション日程・2007 年度・造形表現学部 1 年）

【在学生に対する指導】

毎年度の授業開始前に学年、各学科等別に、所属研究室でオリエンテーションを実施し、新学年における履修上のさまざまな留意点について説明を行っている。例えばグラフィックデザイン学科では、導入教育（１年次）及び基礎教育（２年次）から専門教育（３・４年次）に移行する時期のオリエンテーションを重視しており、２年次の 12 月に専門教育のオリエンテーションを１週間かけて実施している。このように各学科等、特に専門教育に進む時などを重視し、オリエンテーションを行っている。

【３年次編入学生に対する指導】

３年次編入学試験の受験生は、年々増加の傾向にある。編入学生は、専攻領域の異なる学校出身者からの合格者は少ないものの、短期大学・高等専門学校を卒業後直ちに入学する者、大学を２年以上在学し所定の単位（62 単位）以上を修得した者、国内の専修学校の専門課程を修了した者等様々である。編入学生に対しては、本学入学前の既履修単位の認定や受講方法についての弾力的運用を行うなど、学生個人に対して異なる学習指導が必要である。３年次編入学生には教務課、入学式前に編入生対象のガイダンスを実施し、新入生同様の学習指導後に、各学科等別に行う研究室オリエンテーション（３年次対象）に引き渡すようにしている。また、教務課では、編入生が本学での学生生活に慣れるまで個別の学習指導を継続している。

【留年者に対する指導】

休学、単位不足による卒業要件未充足者、学費未納付者など、留年理由は様々である。これらの学生に対する指導は、留年理由に対して個別的に行わなければならないので、履修科目の担当教員、研究室、教務部または造形表現学部事務部、学生相談室などが連携をして、指導を行っている。

また、本学の特徴として、卒業制作に合格しなければ卒業が出来ないという厳しい措置があるが、通常は卒業が１年間延期となるところを、年度の途中であっても作品を完成し審査に合格すれば､教授会の議を経て 9 月 30 日付け(前期末)の卒業を認める場合がある。これは、留年者のみに適用する教育的な配慮である。

【オフィスアワー】

専任教員は、就業規則で原則として週に３日の出校が義務づけられており、授業のない時間帯、昼休み（休憩中）など、様々な事柄について、いつでも相談出来る体制を整えている。制作や授業に関すること、履修方法や学生生活のことなど、研究室や教員個人の研究室を自由に訪問し相談を行っている。また、専任教員に限らず非常勤教員も相談にあたり、学生相談室との連携も密である。

この指導体制については、日々、少人数体制で授業を行っていることにより、本学の文化として育まれている。このようにきめ細やかな学習指導体制を採っていること、研究室が Face to Face の体制でいつでも相談可能であること等から、統一の時間を定めたオフィスアワーとして制度化していない。

統一の時間を定めたオフィスアワーについては、一方通行的なマスプロ講義の弊害解消

措置であることを考えると、本学には必ずしも必要とは考えていない。しかしながら、より気軽に質問や相談を受けられるように、教員個々の裁量に拠らないオフィスアワーを実施して行くことも検討している。

【教授法の開発等】

ギャラリーにおける講評会は、教員と学生が一同に会して教育成果発表や意見交換を行う場である。ギャラリーでの講評会は、オープンスペースで行われるため、他学科等の教員にとって教授法の開発の役割も負って来た。学外の特別講師なども参加する機会もあり、教員相互間だけでなく学外者も含めた広い視野での教授法の開発に役立っている。

また、その教育成果の発表は授業の「ねらい」と共に展示されることが多く、教授法が他学科等の教員だけでなく学生や学外者の評価を受けることにもなる。このような学生、教員相互、学外者に開かれた講評会の取り組みを通じて、PBL 科目の設置など新しい教育手法の実現に繋がっている（本区分 P.43-46 参照）

しかし、上述した講評会を通した教授法の開発や、授業評価アンケート（本区分 P.63 参照）などの個別的な取り組みは行って来たが、組織立った FD 活動については、十分でないところもある。改善方策として、教育充実検討委員会において組織的な FD 活動の検討を行う予定である。

ロ．履修登録ガイダンス等の実施

カリキュラムは、各学科等の教育目標に沿って入学から卒業まで効果的に学習できるように構成されている。学生はこの目的を理解し、「履修案内」、「シラバス」をよく読んで、間違いのないよう履修登録をしなければならない。

美術学部の履修登録は、学内及び学外からパソコンを使って行う、WEB 登録を採用している。教務課では、授業開始日前後の４日間をかけて、学年別に履修登録ガイダンスを実施している。このガイダンスでは、研究室と協力して各学科等別に実施し、必修科目など履修上の注意事項の再確認や WEB 履修におけるパソコンの操作説明などを行っている。

履修登録科目は、個々の学習目的やコース選択、あるいは教職・学芸員などの資格課程などによって異なるため、それに応じたきめ細やかな指導体制が必要である。授業開始日から履修登録終了（WEB 登録の入力期限）までの間、教務部の職員約２名が常時、個別の履修相談と指導にあたっている。また、履修登録期間中は学内で登録ができるようにコンピュータルームを開放しているが、そこにも職員が在室してパソコン操作が不慣れな学生などに対してアドバイスを行っている。

造形表現学部でも美術学部と同様の指導を行っている。造形表現学部の履修登録は、学内のパソコンを使って行う WEB 登録と、マークシート用紙に記入するマークシート登録があり、学生がどちらかを選択して登録する。これまで事務ガイダンスは入学式後の昼時間帯に実施していたが、社会人学生に配慮した改善方策として 2007 年度より翌日の夜時間帯に実施することとした。これにより、入学式に出席できない学生でも学生生活において基本的な説明を行う事務ガイダンスに出席出来るようになった。また、事務受付時間を 21 時 30 分まで延長し、授業終了後でも受付可能とした。

学生からの履修に関する相談内容や問題点については、各学科等の教務主任、カリキュ

ラム委員、事務職員が出席する会議において報告がなされ、次年度以降の指導に活かしている。2007 年度の WEB 履修登録は学内のみの利用だったが、改善方策として 2008 年度からは学外からも利用できる予定である。

ｂ．研究指導

適用	記述に係る主要点検・評価項目
大学院	Ａ群：課程制博士課程における、入学から学位授与までの教育システム・プロセスの適切性 ：教育課程の展開並びに学位論文の作成等を通じた教育・研究指導の適切性 Ｂ群：指導教員による個別的な研究指導の充実度

イ．教育課程の展開

大学院においては専門性がより高くなるため､研究指導は課程の展開に密接に関連する。研究指導状況を説明する前提として課程の展開について次のとおり記述する。

大学院博士前期課程（修士）では、専攻領域について主体的に研究を進める能力を育成する目標から、5 専攻を 12 研究領域に細分化し、少人数、双方向を基本とした授業形式を採る。教育・研究指導を実質化するための環境を整えている（表Ⅱ-三-19 参照)。

さらに、実践力を養う各専攻の専門科目（必修）に加え、学術研究の進歩や文化の多様化、研究者に必要な教養や倫理観の涵養に留意した共通選択科目を配置している。

専攻	研究領域
絵画	日本画、油画、版画
彫刻	彫刻
工芸	工芸
デザイン	グラフィックデザイン プロダクトデザイン テキスタイルデザイン 環境デザイン 情報デザイン コミュニケーションデザイン
芸術学	芸術学

（表Ⅱ-三-19　博士前期課程各専攻の研究領域）

大学院博士後期課程（博士）は、博士前期課程（修士）が細分化されているのに対し、美術専攻という一つの領域に統合している。授業科目は、論文及び実技指導をする総合研究指導（必修）に加え、美術創作と美術理論をどちらも履修するカリキュラム構成となっており、実技と知識の融合を推し進めている。

ロ．研究指導の方法

博士前期課程（修士）５専攻のうち修士論文を課しているのは、芸術学専攻とデザイン専攻のみであるが、他の専攻でも作品に関するレポート指導が行われている。

論文・実技指導については、ファインアート系専攻では研究課題を提出させ、デザイン系専攻では出願時に研究テーマと希望担当教員を申告させ、個別指導を基本とする指導上の責任を明確にしている。しかし学生の能力を多面的に発展させ、広い視野や豊かな学識を涵養するために複数教員による指導も行っている。専攻の教員、学生が一堂に会した講評会を定期的に実施することで、教員、学生供に学問的刺激を誘発させている。

博士後期課程（博士）では、入学試験において実技指導教員の希望を聞き、入学後のミスマッチがないよう配慮すると共に、十分な指導体制を整えたうえで受け入れている。オリエンテーションでは博士後期課程（博士）担当教員全員と学生の個別面談を実施し、論文指導教員を決定している。

原則、主査１名、副査２名の担当教員が付き、個別に指導にあたるが、総合演習や論文中間報告会などは博士後期課程（博士）担当教員と全学生が参加して実施し、学問的刺激を誘発させている。

修了まで同じ指導教員を原則としているが、研究領域の再考など変更希望があった場合は、大学院研究室で理由を取りまとめ関係教員と調整を行っている。

ｃ．教育改善を通したサポート

適用	記述に係る主要点検・評価項目
大学・学部	Ａ群：学生の学修の活性化と教員の教育指導方法の改善を促進するための措置とその有効性 ：シラバスの作成と活用状況 ：学生による授業評価の活用状況 Ｂ群：教育上の効果を測定するための方法の適切性 ：教育効果や目標達成度及びそれらの測定方法に対する教員間の合意の確立状況 ：教育効果を測定するシステム全体の機能的有効性を検証する仕組みの導入状況 ：ＦＤ活動に対する組織的取り組み状況の適切性
大学院	Ａ群：教員の教育・研究指導方法の改善を促進するための組織的な取り組み状況 ：シラバスの適切性 Ｂ群：教育・研究指導の効果を測定するための方法の適切性 ：学生による授業評価の導入状況

教育改善については、カリキュラム委員会、自己点検・評価部会等を組織して、全学を挙げて改善に取り組んでいる。これら教育改善を通してカリキュラムの魅力を引き出す取り組みを行っている。

イ．シラバスの活用

履修の便に供することを目的として、当該年度に開講される全授業科目について「授業計画書（シラバス）」を作成している。シラバスは、次の項目について１科目１ページに記載している。

①科目名、担当教員
②配当年次、単位区分（必修、選択、自由など）
③開講時期、授業形態（講義・演習・実技など）、単位数
④授業のねらい（学修目標）
⑤授業の展開計画（毎回の授業内容）
⑥履修上の注意事項（前提科目、事前の準備など）
⑦評価方法（成績評価基準）
⑧テキスト（教科書）
⑨参考文献（参考書）
⑩備考

美術学部のシラバスは、長年冊子として作成して来たが、膨大な頁数により携帯性に問題があったため、2007 年度より WEB 公開するものとした。利用にあたっては、ホームページにより WEB 履修登録システム「Live Campus」にアクセスして参照する。

これに伴い、学生は履修システム（WEB 履修登録）と併用して、学内・外を問わず、いつでも最新の情報を WEB 上で閲覧することが可能となり、利便性が格段に改善された。

また、発行が遅れていた大学院についても 2006 年度より冊子として作成し、学部同様 2007 年度より WEB 上にて公開している。造形表現学部については、2009 年度より WEB 化を実施する予定である。

WEB 化により携帯性が高まり（必要なものをプリントアウトすれば良い）、単なる科目紹介ではなく、教員と学生の対話ツールとしてシラバスの活用を進めている。これら改善方策は、利便性だけでなく対話ツールとしてのシラバス活用と言うファカルティ・ディベロップメントとしての効果も見込まれる。

ロ．リザーブド・ブックシェルフコーナーの設置

これまで履修登録において科目選択の判断材料はシラバスだけであった。より明確に授業内容がイメージ出来るように、科目選択に関する情報を可能な限り提供する必要があった。

改善方策として、2007 年度よりシラバスに記載の教科書・参考書（一部、絶版書籍、カタログ等を除く）を複数冊購入し、「リザーブド・ブックシェルフコーナー」として八王子、上野毛両キャンパスの図書館に設置した（表Ⅱ-三-20 参照）。

履修登録前に選択科目を判断する材料として、事前に教科書を確認することが出来る他、日常の予習・復習等の学習教材としても利用することが出来るようになった。

品　名	八王子キャンパス	上野毛キャンパス
教科書（各 1 冊）	55 冊	97 冊
教科書（各 2 冊）	54 冊	
参考書（各 2 冊）	52 冊	
参考書（各 3 冊）	253 冊	

（表Ⅱ-三-20　リザーブド・ブックシェルフ用図書配備実績）

ハ．授業評価アンケートの実施

2002 年度からは、授業についての率直な意見を学生から聴取し、教育の改善と充実に役立てるため「学生による授業評価」を実施している。教育充実検討委員会自己点検・評価部会により、学期末に全授業においてアンケート形式で実施され、回答は全て統計処理をしてホームページで公開している。授業評価の結果は、これまでのカリキュラムの開発と向上に反映させている。なお、2005 年度で一旦区切りをつけ、アンケート項目の見直し等を行い実施することを検討している。

ｄ．その他のサポート（社会人学生・外国人留学生等）

適用	記述に係る主要点検・評価項目
大学・学部	Ｂ群：生涯学習への対応とそのための措置の適切性、妥当性 Ｃ群：社会人学生、外国人留学生、帰国生徒に対する教育課程編成上、教育指導上の配慮
大学院	Ａ群：社会人、外国人留学生に対する教育課程編成、教育研究指導への配慮 Ｃ群：社会人再教育を含む生涯学習の推進に対応させた教育研究の実施状況

社会人、外国人留学生、帰国子女は、基本的に一般の学生と同等に扱っており、教育課程編成、教育研究指導等において特別な配慮は行っていない。

しかし造形表現学部は、社会人教育を目的の大きな柱とするため、多くの社会人が学んでいる。約 30%を社会人が占めており、平日（月～金曜日）が午後６時～午後９時 10 分まで､土曜日は午後２時～午後９時 10 分までの授業時間により４年間で卒業できるカリキュラムを組んでいる。また制作を主とする美術大学の特性を考慮し、平日でも午後２時からアトリエを開放している。制作・学習時間に限りのある社会人学生に対して、利用時間の制限を可能な限り設けない措置である。

美術学部、大学院美術研究科では、様々な国・地域からの多数の外国人留学生が学んでいる（Ⅱ-四．学生の受け入れ P.90-91 参照)。

したがって、外国人留学生には、日本語の理解力・習熟度に応じて、実技授業のなかで若干の配慮はしている。具体的には、課題説明時や講評会などにおいて、会話速度を意識したり、担当教員が個別に理解度を確認し補足説明を行っている。また、授業内容を補完するために、資料を配布するように努めている。外国人留学生は、語学面だけでなく、食生活や医療など文化や社会制度などの違いによる様々なハンディがあり、日本人学生にも支えられ、共に刺激を与え合いながら学んでいる（留学生生活アドバイザー制度についてはⅡ-十．学生生活 P.164-165 参照)。

（６）学位授与・成績評価：●

「学位の通用性」の観点から学位授与・成績評価については、①学修内容に精粗が生じないこと、②評価の客観性を担保することを目標としている。

カリキュラム編成、制度、サポートからなる学修プログラムは、公平・公正な評価を以って最終的に成し遂げられる。この考え方に基づき、上記目標を掲げて学位授与・成績評価に取り組んでいる。

ａ．学位授与

適用	記述に係る主要点検・評価項目
大学院	Ａ群：修士　博士の各々の学位の授与状況と学位の授与方針・基準の適切性 Ｂ群：学位審査の透明性・客観性を高める措置の導入状況とその適切性 Ｃ群：修士論文に代替できる課題研究に対する学位認定の水準の適切性 ：学位論文審査における、当該大学(院)関係者以外の研究者の関与の状況

前述したように、学位授与については学年ごとに進級要件を設定し、卒業・修了制作（論文）を課す等厳格な評価を行って来た。

しかし、厳格な評価の基礎となる学修内容については明文化されていなかった。2007 年 10 月に次のとおり「ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）」を策定し、学修内容の共有を図り、学修内容に精粗が生じない措置を行った。

また各専攻においては、予め卒業制作要項等により修了認定に係る評価基準を明示し、透明性の担保と厳格な審査に取り組んでいる。

多摩美術大学ディプロマ・ポリシー
大学院（博士）
学術研究の指導者・国際的に活躍する専門職業人として、美術研究の深奥を窮める期間と位置付け、次のことを身につけることを求めます。 ・自己のテーマを確立し、独創的な探求を行なったか ・高度な専門性と、専門性に捕われない自由な探究心を両立しているか ・美術創作研究と美術理論研究の双方にわたる総合的な視野を備えることができたか ・海外、国内等のコンクール、個展、学会等の発表などで高い成果をあげることができたか
大学院（修士）
学部教育を基礎にして、更に創作・研究を深める、専門的職業人の育成期間と位置付け、次のことを身につけることを求めます。 ・自己のテーマに沿って、創作・研究を理論と実技の両面から探求しているか ・自立したアーティスト・デザイナー・研究者・教育者として、高い倫理性を具え、それらに対する責任を意識しているか ・社会の一員としての自覚を持ち、幅広い領域のアーティスト・デザイナー・研究者との交流を積極的に行なったか ・コンクール、個展等の発表などに意欲的に取り組んだか
学部（学士）
［専門教育］ アーティスト・デザイナー・研究者・教育者として活躍する第一歩と位置付け、次のことを身につけることを求めます。 ・主体性、自主性を持って、創作・研究に取り組めているか ・社会との繋がりを認識し、テーマを広げ、深める能力を身につけているか ・ものごとを総合的に捕らえ、プランニングと実施を行なうことができたか ・自分の言葉でプレゼンテーションし、他者に伝える能力を身につけているか **［基礎教育］** 専門教育への準備と位置付け、次のことを身につけることを求めます。 ・創作・研究において計画力、実施力、反省力を身につけているか ・「ものを見る」基本的な能力を身につけているか ・表現力、技術力を充実させ、専門分野への理解を以って、それらを駆使することができたか ・専門分野の基本的な歴史と創作・研究プロセスを理解しているか **［導入教育］** 創作・研究の基礎づくりと位置付け、次のことを身につけることを求めます。 ・創作・研究の根拠、目標や課題を理解し、美術大学で学ぶことに自覚的であるか ・ものごとを深く洞察し、可能性を探ることに感動や好奇心を持って取り組んだか ・理解した目標や課題を具体化する基本的な技能を備えることができたか ・素材、用具の基礎知識を身につけているか

※上記学修内容を習得し、所定卒業（修了）単位の取得と卒業制作等・修了論文審査により学位を授与する。

このディプロマ・ポリシーで定める能力を身につけた者について、次のとおりの修了審査を行う。なお、学士については評価項目ではないので割愛する（次の成績評価法で詳述する）。

イ．大学院博士前期課程（修士）

大学院美術研究科博士前期課程（修士）を修了するためには、共通選択科目（選択必修）を８単位以上及び各専攻の専門科目（必修）を 22 単位、合計 30 単位以上を修得し、かつ修士論文（作品）を提出し審査に合格しなければならない。厳格な成績評価と適切な研究指導により、博士前期課程については課程制大学院として標準修業年限内の学位授与が確保される結果となっている（表Ⅱ-三-21 参照）。

博士前期課程の学生の指導体制は、原則各専攻で決定している。修了審査方法については、次のとおりである。

絵画専攻（日本画・油画・版画）‥‥‥‥修士作品による審査
彫刻専攻‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥修士作品による審査
工芸専攻‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥修士作品（研究レポート含む）による審査
デザイン専攻‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥修士論文および修士作品による審査
芸術学専攻‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥修士論文による審査

専攻名	2003 年度	2004 年度	2005 年度	2006 年度
絵画専攻	70	53	58	68
彫刻専攻	10	14	10	10
工芸専攻	8	13	12	8
デザイン専攻	25	25	36	34
芸術学専攻	5	5	5	9
合計	118	110	121	129

（表Ⅱ-三-21　学位授与状況・博士前期課程）

ロ．大学院博士後期課程（博士）

大学院美術研究科博士後期課程（博士）を修了するためには、必要単位を修得し、かつ博士論文を作成し、審査及び試験に合格しなければならない（表Ⅱ-三-22 参照）。博士後期課程（博士）についても、担当教員による個別指導に加え、全学生・担当教員によって実施される総合演習（全体講評会）及び学位申請年度には、事前審査、予備審査、本審査が有機的に整備されており、課程制大学院制度の徹底が図られている。

	必修	選択必修	
１年	総合研究指導 （２単位）	美術創作研究Ⅰ （４単位）	美術理論研究Ⅰ （４単位）
２年	総合研究指導 （２単位）	美術創作研究Ⅱ （４単位）	美術理論研究Ⅱ （４単位）
３年	総合研究指導 （２単位）		
修了要件	６単位	１２単位以上	

（表Ⅱ-三-22　必要修得単位・博士後期課程）

博士後期課程（博士）については、７月に主査・副査合同による事前審査を行い（後期課程の担当教員・学生全員参加)、９月には作品審査を含む予備審査、１月には学外審査員を含む公開審査で学位審査が行われる。

指導における理論領域と実技領域のバランスについては、全員が理論領域であり論文指導の主査を分担している。副査には、学生１名に対し博士後期課程（博士）専任教員と実技領域の教員が各１名担当することを原則としている。また、作品に対する評価は、実技領域の副査教員の意見を尊重するものとしているが、論文及び作品ともに主査・副査で合議したうえで、最終評価は主査が行っている（表Ⅱ-三-23 参照)。

2003 年度	2004 年度	2005 年度	2006 年度
3	5	2	4

（表Ⅱ-三-23　学位授与状況・博士後期課程）

ｂ．成績評価方法等

学位を授与する基礎となる各単位の成績評価方法等については次のとおりである。

イ．科目履修の枠組み

適用	記述に係る主要点検・評価項目
大学・学部	Ａ群：履修科目登録の上限設定とその運用の適切性

各単位の成績評価方法を説明の前提として、科目履修の枠組みを次のとおり記述する。

共通教育科目（造形表現学部は基礎教育科目）は、全学生を対象として共通に履修出来るものであり、選択科目を中心として学科等ごとに卒業に必要な単位数を定めている。共通教育科目（基礎教育科目）は、美術学部には 150 科目以上、造形表現学部には 60 科目の授業科目がバランスよく開講され、体系性と柔軟性を持たせている。

専門教育科目は、必修科目または選択必修科目が中心であり、卒業要件 124 単位中に占める割合が大きい（表Ⅱ-三-24 参照)。これらの授業科目は、履修年次が仔細に指定され

ており、多くの必修科目は各学年の進級要件にもなっている。

学科等		専門教育科目必修単位数				
		1年次	2年次	3年次	4年次	合計
絵画学科日本画専攻	必修	18	18	16	22	74単位
絵画学科油画専攻	必修	16	16	18	20	70単位
絵画学科版画専攻	必修	20	20	14	12	66単位
彫刻学科	必修	18	18	22	22	80単位
工芸学科	必修	16	16	16	20	68単位
グラフィックデザイン学科	必修	16	17	4	11	66単位
	選必			12	6	
生産デザイン学科 プロダクトデザイン専攻	必修	28	30	16	20	94単位
生産デザイン学科 テキスタイルデザイン専攻	必修	21	19	8	12	86単位
	選必			14	12	
環境デザイン学科	必修	24	30	24	11	93単位
	選必				4	
情報デザイン学科	必修	20	16	16	26	102単位
	選必		24			
芸術学科	必修	12	4	4	6	88単位
	選必	62				
造形学科	必修	12	12	12	18	78 単位
	選必	4	4	4	4	
		+8				
デザイン学科	必修	2	6	2	8	66 単位
	選必	12	12	8	12	
				+4		
映像演劇学科	必修	22			10	68 単位
	選必	36				

※「選必」は選択必修

（表Ⅱ-三-24　専門教育科目必修単位数）

時間割の配置において、美術学部は原則として１・４年生は１・２時限が専門教育科目（実技科目）、３・４時限が共通教育科目の時間帯として組まれている。一方で２・３年生は１・２時限が共通教育科目、３・４時限が専門教育科目の時間帯となっている。５時限は全学年が任意に履修できる時間帯としている（表Ⅱ-三-25 参照）。

造形表現学部では原則として月曜日～木曜日３・４時限が専門教育科目（実技科目）、金曜日３・４時限と土曜日１～４時限が基礎教育科目の時間帯として組まれている（表Ⅱ-三-26 参照）。このように、社会人学生が履修できるように時間割設定がなされ、履修出来

る授業数は限られている。

カリキュラム編成上、必修科目または選択必修科目の割合が高く、進級要件科目によって学年ごとの目標と到達点が明確に示されている。各単位の成績評価に先立って、科目履修の枠組みで学修の質を担保する方策が採られている。よって、時間割の配置においても履修可能な授業科目が指定されていることから､履修科目登録の上限設定は設けていない。

<table>
<tr><th colspan="2"></th><th>月</th><th>火</th><th>水</th><th>木</th><th>金</th><th>土</th></tr>
<tr><td>1 時限</td><td>9:00～10:30</td><td colspan="6" rowspan="2">①各学科の専門教育科目（実技科目）の時間帯</td></tr>
<tr><td>2 時限</td><td>10:40～12:10</td></tr>
<tr><td>3 時限</td><td>13:00～14:30</td><td colspan="6" rowspan="2">②共通教育科目の時間帯</td></tr>
<tr><td>4 時限</td><td>14:40～16:10</td></tr>
<tr><td>5 時限</td><td>16:20～17:50</td><td colspan="6">③全学年が任意に履修できる時間帯</td></tr>
</table>

（表Ⅱ-三-25　授業時間割配置・美術学部）

※１・４年生の場合（２・３年生の場合は①と②が逆になる。）

<table>
<tr><th colspan="2"></th><th>月</th><th>火</th><th>水</th><th>木</th><th>金</th><th>土</th></tr>
<tr><td>1 時限</td><td>14:00～15:30</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>2 時限</td><td>15:40～17:10</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>3 時限</td><td>18:00～19:30</td><td colspan="4" rowspan="2">①各学科の専門教育科目の時間帯</td><td colspan="2" rowspan="2">②基礎教育科目の時間帯</td></tr>
<tr><td>4 時限</td><td>19:40～21:10</td></tr>
</table>

（表Ⅱ-三-26　授業時間割配置・造形表現学部）

ロ．成績評価法と基準

適用	記述に係る主要点検・評価項目
大学・学部	Ａ群：成績評価法、成績評価基準の適切性 Ｂ群：厳格な成績評価を行う仕組みの導入状況 ：各年次及び卒業時の学生の質を検証・確保するための方途の適切性
大学院	Ｂ群：学生の資質向上の状況を検証する成績評価法の適切性

成績評価については、学部は学則第６条、大学院は大学院学則第９条～13 条に規定している。

美術学部、造形表現学部の成績評価の方法については、「履修案内」に詳しく記載している。また、授業科目ごとの成績評価基準は、「シラバス」に明記している。

出席は授業の 2／3 以上を必要とし、平常成績（小試験、作品等）あるいは学期末または年度末考査（作品、ペーパーテスト、レポート等）の成績により単位を認定する。

評価は、その成績によりＡ・Ｂ・Ｃを合格、Ｄを不合格としている。また、評価区分は学科系科目と実技系科目を分けているところに本学の美術大学としての特徴がある(表Ⅱ-三-27 参照)。実技系科目の合格最低ラインが厳しくなっている。成績の認定にあたっては、全学生の成績について教務主任会議で報告、確認依頼を行い、教授会で報告、承認を行うという仕組みを設けており、客観性及び厳格性を確保している。

記号	評点		合否
	学科系科目	実技系科目	
A	100～80 点	100～80 点	合格
B	79～60 点	79～70 点	
C	59～50 点	69～60 点	
D	49 点以下	59 点以下	不合格

（表Ⅱ-三-27　評価区分）

追試験の実施については、病気、忌引き、交通機関の遅延、火災・風水害その他の災害により登校不能な場合など、やむをえない理由で年度末考査において所定の試験に欠席した者に対してのみ実施している。評価は本試験と同等に行い、授業は 2／3 以上出席していなければならない。

また、各学年の進級時には、学年、学科等ごとに所定の進級要件科目が指定されており、この科目の単位が修得出来ない学生は、留年しなければならない。これは、各学年において関門が敷かれており、一定のレベルに達しないと次の学年の授業科目を履修出来ないという厳しい措置である。

大学院美術研究科の成績評価については、学生は過去の修了論文及び博士論文を自由に閲覧可能としている。学生は比較・参考に出来ると共に、個別科目の成績評価にも問い合わせに応じている。さらに、成績の認定にあたっては、学部と同様、全学生の成績について大学院教務委員会で報告・確認依頼を行い、大学院委員会で報告・承認を行っている。

ハ．成績の通知

毎学年の３月中旬に進級、卒業判定結果通知、成績表を保証人宛てに送付している。これは、本人のみならず学費負担者である保証人にも常に学修状況を知らせることを目的に行っている。

学位授与、成績評価方法等については、上記ａ～ｂで詳述したとおり厳格に取り組んでおり高く評価出来る。しかしながら学科等ごとの専門性が非常に高く、評価についても学部等の統一した学修内容が明文化されておらず､学科等の独自基準に陥る可能性があった。

「学位の通用性」が問われている昨今の情勢を鑑み、学位授与については、改善方策として 2007 年 10 月に前述したディプロマ・ポリシーを定めた。これにより「学位の通用性」を高める措置を図ったと評価出来る。

また成績評価基準については、近年では GPA 制度（Grade Point Average）を採りいれている大学も増えているが、美術大学の実技科目において相応しいかは評価の分かれるところである。しかしながら、成績評価に対する社会からの要求、透明性に対する学生からの要求に対して、目に見える何らかの形でアカウンタビリティを高める必要があると考えている。

これらに対する改善方策として、①評価区分に分かり易い文言を付し透明性を高める、②成績評価を現行の「Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ」から「Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ」とし評価精度を高めるとともに、学習意欲を喚起する、ことが考えられる。

これについては教育充実検討委員会・カリキュラム検討部会において、上記方策を策定し 2008 年度から実施することになった（Ⅱ-十四．自己点検・評価 P.217 参照）。

（７）その他：◎

上述した基本的な教育プログラムに加え、あらゆる観点から教育上の機会等を提供することを目標としている。

その他事項について、以下のとおり記述する。

ａ．マルチメディアの活用

適用	記述に係る主要点検・評価項目
大学・学部	Ｂ群：マルチメディアを活用した教育の導入状況とその運用の適切性

マルチメディア機器の配備状況については「Ⅱ-七．施設・設備等 P.128-130」で記述した。導入状況については、デザイン系学科等は教育目標を実現する上で欠くことが出来ない。これについてはカリキュラム内容で記述した（本区分 P.21-23 参照）。ファインアート系学科に対するリテラシー教育も行っており（Ⅱ-七．施設・設備等 P. 129-130)、マルチメディア教育については、積極的に行っている。

ｂ．カリキュラムにおける高・大の接続

適用	記述に係る主要点検・評価項目
大学・学部	Ａ群：学生が後期中等教育から高等教育へ円滑に移行するために必要な導入教育の実施状況

現在のところ入学前プログラム、補習教育（リメディアル教育）等は実施していない。これは、入学試験で高い志願者倍率を維持し、適正な選抜方法により入学者の学力水準が担保されていることによるものである。１年次の「導入教育」は高等学校教育との円滑な接続を促進するための教育という捉え方ではない。２年次の「基礎教育」と３・４年次の「専門教育」に移行するための基礎力をさらに磨き上げるための教育と位置付けている。

入学者の学力を担保するために、アドミッション・ポリシーを明確にし、本学が求める学生像や、入学前段階で修得すべき内容・水準等を具体的に明示している。しかし、特別入学試験（外国人留学生試験・帰国子女入学試験・３年次編入学試験・社会人入学試験）や自己推薦入学試験（工芸学科・彫刻学科・映像演劇学科）など、選抜方法が多様化する傾向にあるので、今後はそれぞれの意義を踏まえ、入学者の受け入れ方針との整合性を確保しつつ、適正に活用して行く。

いわゆる「大学全入」時代における学習意欲の低下や目的意識の希薄化が社会的な問題になっているなか、本学では入学者へのオリエンテーションも重視している（本区分 P.56-57 参照）。また、担任や指導教員制度を採っていないが、研究室による体制がその役割を十分に果たしている。学生が所属する研究室では教員、助手、副手が、履修指導、学生生活のアドバイス等をきめ細かく行っており、新入生にとって大学になじみやすい環境を用意している。

この他の取り組みとして、2004 年から近隣の高校生に本学の実習や講義を受講する機会を設けている（表Ⅱ-三-28 参照）。東京都立芸術高等学校、東京都立片倉高等学校の希望者を対象に、絵画学科版画専攻、工芸学科、グラフィックデザイン学科、生産デザイン学科テキスタイルデザイン専攻、情報デザイン学科などで実現して来た。2007 年度には、東京都立八王子桑志高等学校が開校するにあたり、４つの専門分野（デザイン・クラフト・システム情報・ビジネス情報）の「デザイン」の教育内容について積極的に提言を行うなど連携をはかり、７月には本学で体験実習を実施した。こうした取り組みによって、高等学校段階から大学レベルの教育研究に触れる機会を提供し、芸術・デザイン分野について強い関心を持ってもらう機会となることが期待される。

2007 年度	1	連携校	都立芸術高等学校、都立片倉高等学校
		実施学科・専攻	絵画学科版画専攻、環境デザイン学科
		日程	7.21　オープンキャンパス 7.25　10:00～16:00 7.26　10:00～16:00 7.27　10:00～16:00 7.28　10:00～16:00
		受講内容	版画　「銅版」・「木版」・「リトグラフ」 環境　「照明器具」と「ひかりの美術館」をつくろう
		受講人数	版画専攻　39 名（芸術高校 33 名、片倉高校 6 名） 環境デザイン学科　11 名（芸術高校 11 名）
	2	連携校	八王子桑志高等学校
		日程	7.21　オープンキャンパス時　ツアー(AM)および体験実習（PM）
		内容	オープンキャンパスツアーおよび体験実習
		受講人数	生徒 214 名、引率教員 12 名
2006 年度	1	連携校	都立芸術高等学校、都立片倉高等学校
		実施学科・専攻	絵画学科版画専攻、工芸学科
		日程	7.22　オープンキャンパス 7.25　10:00～16:00 7.26　10:00～16:00 7.27　10:00～16:00 7.28　10:00～16:00
		受講内容	版画専攻　「銅版」・「木版」・「リトグラフ」 工芸専攻　「陶」・「金属」
		受講人数	版画専攻　32 名（芸術高校 25 名、片倉高校 7 名） 工芸学科　24 名（芸術高校 17 名、片倉高校 7 名）

（表Ⅱ-三-28　高等学校との連携状況）

c．カリキュラムと資格

適用	記述に係る主要点検・評価項目
大学・学部	C 群：国家試験につながりのあるカリキュラムを持つ学部・学科における、受験率・合格者数・合格率

美術学部では、情報デザイン学科と芸術学科を除く全学科等において、中学校教諭一種免許状（美術）および高等学校教諭一種免許状（美術・工芸）を取得することが出来る。情報デザイン学科においては、高等学校教諭一種免許状（情報）を取得することが出来る。

また、美術学部、造形表現学部の全学科等においては、学芸員資格を取得することが出

来る。

大学院美術研究科においては、中学校教諭専修免許状（美術）及び高等学校教諭専修免許状（美術）を取得することが出来る。

上記の資格を取得するために、教職に関する専門科目（教職課程）と博物館に関する専門科目（学芸員課程）を設置している。

教職課程は、毎年 100 名を越える取得者を輩出し、就職・進路の受け皿としての一助になっている。1998 年の教育職員免許法の改正により、教育実習期間の延長や教職関連科目の増加がもたらされ、新たに 2009 年には教員免許更新制が導入されることになっている。美術の教育現場では、中学校１年生で週２時間あった授業が１時間に削減されるなど、美術の基礎・基本はもとより、芸術教育としての本領を発揮するには、厳しい状況になっている。このような美術教育を取り巻く現況において、教職関係のみならず教職関連領域の教養と専門との連携を図る必要がある。教育実習の充実、少人数制による実習および講義の実施、教育実習の研究授業訪問指導を全学的に取り組むため、2008 年度より教職課程委員会を設置することになった。

学芸員課程は、博物館法に則ったものであり、文化財の保存と研究、およびそれに伴う展示・教育という流れのなかで博物館のあり方を追求する立場を基本としている。

上記資格の取得状況は次のとおりである（表Ⅱ-三-29・30 参照）。

免許状種類	2003 年度	2004 年度	2005 年度	2006 年度
中学校教諭一種免許状（美術）	66	107	92	109
高等学校教諭一種免許状（美術）	77	114	95	108
高等学校教諭一種免許状（工芸）	45	65	60	71
高等学校教諭一種免許状（情報）			10	3
中学校教諭専修免許状（美術）	27	21	26	23
高等学校教諭専修免許状（美術）	29	23	25	24
学芸員資格	53	60	65	80

（表Ⅱ-三-29　免許状等取得状況・美術学部）

免許状種類	2003 年度	2004 年度	2005 年度	2006 年度
学芸員資格	45	59	56	61

（表Ⅱ-三-30　免許状等取得状況・造形表現学部）

上記以外の資格として、環境デザイン学科において、２年間の実務経験後に１級建築士、卒業後に２級建築士、３年間の実務経験後に１級施工管理技士、１年間の実務経験後に２級施工管理技士の受験資格が得られることになっているが、合格者等については、卒業後の受験資格であるため、把握していない。

ｄ．インターン・シップ等の実施状況

適用	記述に係る主要点検・評価項目
大学・学部	Ｂ群：卒業生の進路状況 Ｃ群：インターン・シップを導入している学部・学科等における、そうしたシステムの実施の適切性 ：正課外教育の充実度

現在、インターン・シップを教育課程の中に正規の授業科目として位置付け、単位の認定を前提とした取り組みは行っていない。しかし、企業等からインターン・シップ申し出は年々増えている状況である。

これまで本学が行ってきたインターン・シップは、研究内容・実施形態等によって各学科等の研究室が窓口となる場合と就職課・教務課が行う場合の２つのパターンがある。

研究室が窓口となるものは、本学が実学志向の強い実技系の大学であり、従来から産学官連携にも取り組んできた実績から、企業等から直接デザイン系を中心とした特定の学科等に対して依頼される、いわゆる現場体験型の実習である。この場合は単なる就業体験ではなく、学生も企業側も卒業後の進路を見据え具体的なビジョンを持って実施されていることが特徴である。参加時期については、授業の出席に支障のない夏季・春季休暇中を基本としている。

【2007 年度インターン・シップ実施企業】

トヨタ自動車（株）・松下電器産業（株）・パナソニックデザイン社・日産自動車（株）・TOTO（株）・（株）本田技術研究所・（株）本田技術研究所 二輪・ダイハツ工業（株）・マツダ（株）・（株）日立製作所・（株）東芝・富士通（株）・パイオニアデザイン（株）・富士重工業（株）・ソニー（株）・三菱電機（株）・（株）GK ダイナミックス・松下電工（株）など

一方で就職課・教務課が窓口となるものは、学科等を特定せず全学的に希望者を募集する場合や、研修内容が職業観の向上を目的とする実習である。これまで学生に対して情報提供のみを行って来た。しかし、現在の日本における若年雇用者の早期離職率増加の大きな要因として、自己の適性・能力に合わない職業選択が挙げられているが、インターン・シップが適正な職業選択を促進し、就職後の職場への適応力や定着率の向上にもつながればと、その効果に期待している。就職課では、2006 年度から学生に対してインターン・シップへの理解を促し、意識づけを行うため、学部３年生及び大学院１年生を対象にガイダンスを開催した。また、学生がより情報収集や応募し易いように、「ハイパーキャンパスシステム」（東京都経営者協会提供）にも加入した。同年に就職課がインターン・シップの募集を受け付けた企業・団体は 28 件（述べ 32 件）であり、参加学生数は 56 名、受け入れ企業は 42 社であった。さらに、2007 年度からは、対象者を１～３年生及び大学院１年生に広げてガイダンスを開催した。実際に受け入れ企業の担当者を招いての説明やインター

ン・シップを体験した４年生が後輩に対してアドバイスを行った。こうして、企業側の受け入れ、学生の関心も高まって来ており、大学として参加者には事前報告、参加後に報告書の提出を義務付けるようにした。

こうした高まりを受けて、今後は単位の認定についても検討して行きたいと考えている。

上記の他に、2007 年の夏季休暇中には、生産デザイン学科プロダクトデザイン専攻と就職課が連携して、自動車メーカーに就職を希望する３年生を対象として、「車系の就職活動対策としてのスケッチスキルアップセミナー」と題して、４日間の短期集中セミナーを行った。今後はさらに、このような正課外の教育を就職活動と有機的に結びつける仕組みを創設して行くことも必要である。なお、卒業生の進路状況については、添付資料番号９・「TAMA ART UNIVERSITY 2008」冊子 P.４～66 参照。

ｅ．国際化

適用	記述に係る主要点検・評価項目
大学・学部	Ｂ群：国際化への対応と国際交流の推進に関する基本方針の適切性 ：国際レベルでの教育研究交流を緊密化させるための措置の適切性 Ｃ群：教育研究及びその成果の外部発信の状況とその適切性
大学院	Ｂ群：国際化への対応と国際交流の推進に関する基本方針の明確化の状況 ：国際レベルでの教育研究交流を緊密化させるための措置の適切性 Ｃ群：外国人研究者の受け入れ体制とその運用の適切性 ：教育研究及びその成果の外部発信の状況とその適切性

イ．国際交流の基本方針

2007 年 4 月に次のとおり国際交流の基本方針を策定した。

～国際交流の基本方針について～

【国際交流の理念】

本学の理念は、国際社会に対応する幅広い教養を身につけた人格の形成を図り、現代社会に貢献する優れた芸術家、デザイナー、教育研究者等を育成し、同時に国際的な芸術家やデザイナー、教育研究者等が集まる創造的な環境を構築することである。

世界規模の美術、産業界における人材輩出大学として、適切な受入と教育を行い、その成果を世界に向けて積極的に情報発信することで日本発の芸術文化を担っていく。

【国際交流の目標】

理念を推進するために、次の目標を重点的課題として掲げる。

①留学生の受入強化
②協定校間交流の充実
③世界への情報発信

［目標の解説］

少子化時代においては日本人受験生が減少していくことは確実である。大学の経営状況の維持と教育の質を確保するためには、質の高い受験生を海外から呼び込む必要がある。世界中で日本ブームが騒がれているが、受験生確保においてはブームのような一過性のものであってはならない。絶えず世界中の受験生を魅了する大学であると同時に世界トップレベルの教育研究機関として存在感を発揮していく。

多摩美術大学はアジアをはじめとする世界の美術大学との交流を通じ、言葉や地域の垣根を越えて人と人の感性が触れあう豊かなコミュニケーションを実現しつつある。こうした実績を基に、今後は留学生受入を強化し、本学出身者が世界的に活躍できるように一層の教育内容の充実を図る。そうした研究活動の実績を外国語ＨＰで発信することで、本学の存在感を高める。

以上より、①～③の項目に力を入れていく必要があると考える。

【国際交流の目標達成に必要な措置】

上記の目標を達成するため、次の具体的な措置を掲げ取り組んでいく。

Ⅰ　留学生受入体制の整備
　ａ．外国語（英語・中国語・韓国語）ＨＰによる受入情報の充実、教育内容等の発信
　ｂ．留学生入学後のケア
Ⅱ　全学生（日本人学生、外国人留学生）の学修を念頭に置いたカリキュラム改革
　ａ．留学生に対する導入教育講座の開講
　ｂ．大学院（修士課程）に英語による共通専門科目の開講
Ⅲ　協定校間交流の充実
　ａ．協定校の拡充

ｂ．プロジェクトを中心とする交流など、新しい形の交流の充実

Ⅳ　世界への情報発信

ａ．英文による教育成果の発信

ｂ．各部署、各研究室等による草の根的な英文情報発信の支援

［具体的措置の解説］

留学生の受入強化には、留学生の学生生活サポート態勢の整備が不可欠である。外国人留学生試験では韓国・中国からの留学生が殆どを占めるが、国費留学生の受入を促進することで、世界各地の留学生を集めることが可能となり、国費留学生は特に帰国後の母国での活躍が期待できる（Ⅰ）。そのためには教育内容の充実が欠かせず、留学生は十分に学修することができる支援等のカリキュラム充実が必要である（Ⅱ）。また、新しい形の交流を含めた対応が必要である（Ⅲ）。本学の活きた情報を発信するために、そうした成果を草の根的に発信できる英文ＨＰを整備しなければならない（Ⅳ）。

ロ．海外への情報発信

英文大学案内は 2002 年に第 1 版を発行し、適宜修正を加えて配付して来た。しかし増加する外国人受験希望者からの問合せや海外教育機関からの訪問時に適切な大学情報を提供するため、改善方策として 2007 年 7 月に全面的な改訂を行った。教育内容や取り組みが、より理解されるように各専門領域の卒業・修了制作作品の写真も多く掲載している。同時に、英文ホームページの内容見直しを行った。また留学生の多くが韓国・中国出身であることを考慮し、韓国語・中国語でのホームページを 2008 年度から新たに設ける。

海外へ適切かつ相当量の情報発信を積極的に行い、本学へのアクセスを高めている。

ハ．教育研究交流の現状

厳選したトップレベル美術大学 7 校（清華大学美術学院、中央美術学院：中国、弘益大学校、東亜大学校：韓国、ヘルシンキ芸術デザイン大学：フィンランド、シルパコーン大学：タイ、アートセンター・カレッジ・オブ・デザイン：アメリカ）と協定締結し、共同研究プロジェクトや交流展覧会、ワークショップなどの密接かつビジョンに溢れた交流を行っている。

海外協定校のうち、弘益大学校、ヘルシンキ芸術デザイン大学とは 2 名ずつ半年間の交換留学を行っている。2006 年にはアートセンター・カレッジ・オブ・デザインと本学 10 名ずつのデザイン分野の学生計 20 名が共同研究プロジェクト「Pacific Rim」を実施した（本区分 P.45-46 参照）。シルパコーン大学とは版画分野の交流が盛んであり、2003 年に版画作品交流展、2006 年、2007 年にはタイ画・日本画・油画・版画の絵画全般の作品交流展・ワークショップを両大学で行っている。